ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 69 号

内里八丁遺跡第10次の発掘調査 ---------- 森下　衛 --- 1
12世紀の土器製塩炉跡 ---------- 田代　弘 --- 7
長岡京の鋳造用溶解炉をめぐって―鋳鉄鋳物生産の様相― ---------- 野島　永 -- 17
弥生時代の東土川遺跡 ---------- 中川　和哉 -- 25
－平成10年度発掘調査略報－ ---------- 31
1．橋爪遺跡第5次　5．川向古墳群第2次
2．シミズ谷古墳群　6．成勝寺跡・岡崎遺跡
3．桑原口遺跡　7．畑ノ前遺跡
4．今福古墳群
府内遺跡紹介　82．福西2号墳 ---------- 39
長岡京跡調査だより・66 ---------- 42
センターの動向 ---------- 45
受贈図書一覧 ---------- 47

1998年 9月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

内里八丁遺跡第10次の発掘調査

森下　衛

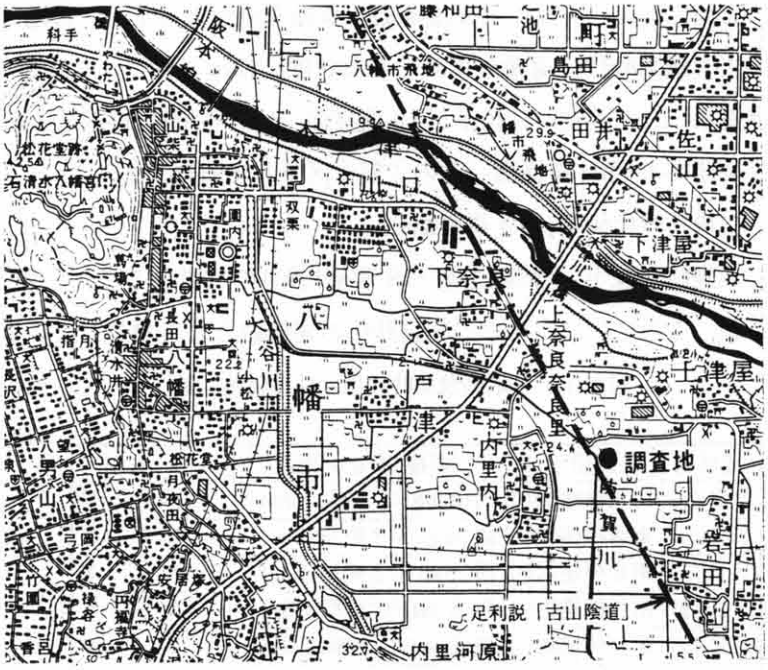
1．はじめに

今回の発掘調査は、第二京阪自動車道路建設に先立ち、日本道路公団の依頼を受けて実施した。本自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、広範囲な調査対象地をＡ～Ｇの７地区に分け、昭和63年度から順次進めてきた。うち、平成８年度までにＡ～Ｄ地区並びにＦ地区北半部（Ｆ１地区）の調査を終了しており[注1]、平成９年度は、残ったＥ地区（約1,000㎡）及びＦ地区の南半部（約3,000㎡）を対象として調査を行った（第２図・黒塗り部）。

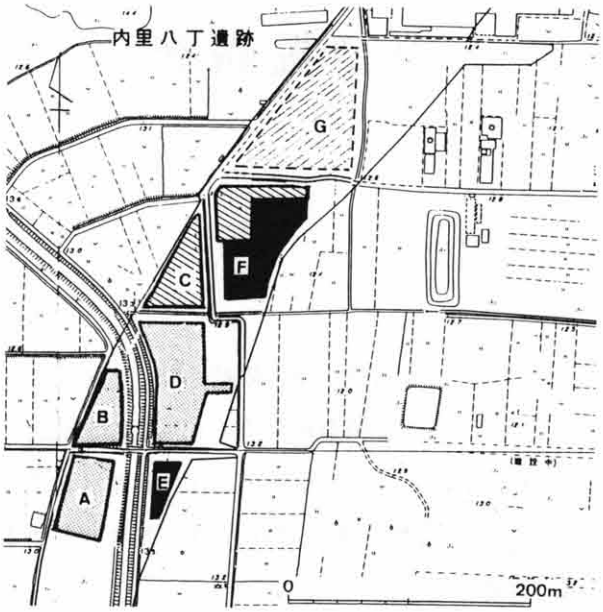
内里八丁遺跡は、八幡市の北東部、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵の東方約３㎞に位置する（第１図）。現在、一帯は木津川西岸の沖積平野が広がり、平坦な水田地帯としての景観をなしているが、周辺には木津川の支流だったと思われる旧河道の痕跡や、その両岸に形成された自然堤防状の微高地などが認められ、かつては比較的起伏に富んだ地形をなしていたことが想像される。内里八丁遺跡は、この自然堤防状の微高地の一つ、現在の上奈良集落から岩田集落を結ぶように広がる微高地上に立地している。

内里八丁遺跡の過去の調査では、弥生時代後期終末～鎌倉時代という非常に長期にわたる時期の遺構・遺物が検出されており、京都府内でも有数の大規模な複合集落遺跡として注目されている。中でも、奈良～平安時代の遺構・遺物には、当遺跡が単なる一般集落とは考え難い要素が認められ、『延喜式』記載の「奈良園」や足利健亮氏復原[注2]の「古山陰道」に関連した公の施設との関連も考えられている。

実際、前回報告した平成９年度上半期の調査では、奈良～平安時代前期の道路状遺構が検出され、古山陰道の痕跡と推察されるなどの成果を得ている[注3]。



第１図　調査地位置図（1/50,000）



第２図　調査区配置図

２．調査の概要

平成９年度の調査は、平成９年４月から同10年３月までの間に実施したが、このうち平成９年度上半期(平成９年10月)までに調査を終えた奈良～鎌倉時代に関する調査成果については既に報告した。このため、ここでは下半期(平成９年11月～平成10年３月)に調査を行った弥生時代後期～飛鳥時代に関する調査成果の概略を報告することにしたい。

調査では、最終的にＥ・Ｆ地区とも６面の遺構面を確認した。時期的には、弥生時代後期～鎌倉時代にわたる。これらを時期別に整理すると、弥生時代後期、弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代～平安時代前期、平安時代中期～後期、平安時代末葉、鎌倉時代以降の８期に区分することができ、以下に報告するのは、弥生時代後期末～飛鳥時代にわたるものである。なお、Ｅ地区の第５・６遺構面に関しては、調査期間等との関係から、平成10年度に改めて調査を行うこととなっているため、ここでは割愛した。

(1) Ｅ地区の発掘調査

Ｅ地区に関しては、第４遺構面の調査成果を報告する。Ｅ地区第４遺構面では、弥生時代後期終末～飛鳥時代の遺構が極めて密な状態で検出された。ここでは、これらを飛鳥時代後半(第４遺構面-１)、飛鳥時代前半(第４遺構面-２)、古墳時代中期～後期前半(第４遺構面-３)、弥生時代後期終末(第４遺構面-４)の４期に区分して報告する。

①飛鳥時代後半(第４遺構面-１)

飛鳥時代後半(７世紀末葉～８世紀初頭)の遺構としては、掘立柱建物跡６棟・溝３条がある。なお、この中には、すでに奈良時代の建物跡として報告しているものも含まれるが、これはその後の整理作業によって最終的にこの時期のものとして判断したためである。

付表１　Ｅ地区飛鳥時代掘立柱建物跡一覧

遺構名	形態	規模(南北×東西)	主軸
ＳＢ226	南北棟建物	５間(8.8m)×２間(4.8m)	N-６°-W
ＳＢ253	東西棟建物	２間(４m)×２間(4.2m)	N-５°-W
ＳＢ333	南北棟建物	３間(５m)×２間(3.5m)	N-５°-W
ＳＢ334	南北棟建物	６間(8.6m)×２間(3.3m)	N-20°-W
ＳＢ335	南北棟建物	２間(3.4m)×２間(3.3m)	N-24°-W
ＳＢ336	総柱建物	１間(1.8m)以上×２間(3.6m)	N-６°-W

掘立柱建物跡は、その主軸方向から、北に向かって５～６°西へ振るもの(ＳＢ226・253・333・336)、同じく20°前後振るもの(ＳＢ334・

335)に大別される。前者は南北に連なって存在し、ＳＢ226は、東西２間・南北５間の南北棟建物であり、その北側のＳＢ253は、南北２間・東西２間以上の東西棟建物と考えられる。さらにその北側にはＳＢ333があり、ＳＢ226の南側には倉庫と考えられる総柱建物ＳＢ336がある。一方、後者では、ＳＢ334が東西２間・南北６間以上の長大な建物に復元され、ＳＢ335はＳＢ334の北辺及び北辺から２間分の柱穴に、立替えの痕跡が認められたことから復元したものである。

溝は、ＳＤ247(南北溝)とＳＤ246(東西溝)を調査区中央やや西寄りで検出した。両者は途中で交差し、前者が後者を切る。また、ＳＤ236はＳＢ253の東辺から南辺をめぐるものである。

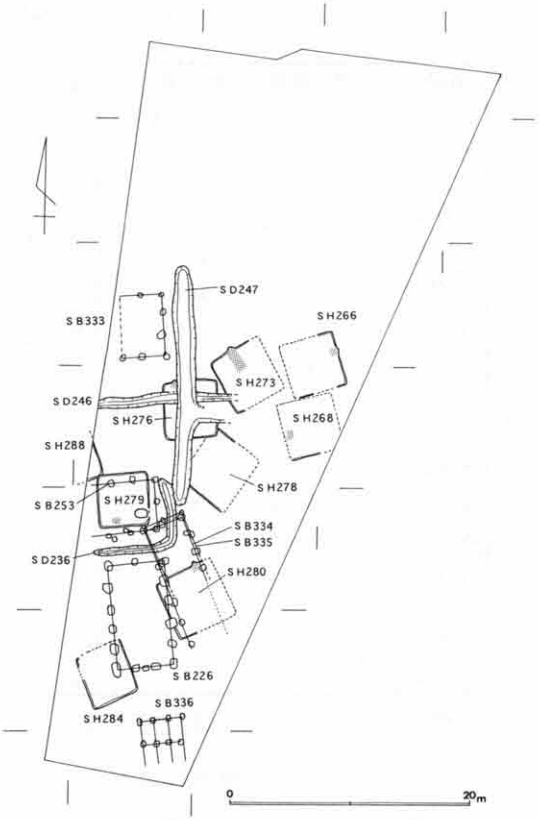
時期的には、主軸が北に向って５～６°西へ振る掘立柱建物跡と３条の溝が７世紀末～８世紀初頭頃に、主軸が20°前後西へ振る掘立柱建物跡が７世紀後半頃に属すと判断している。

②飛鳥時代前半(第４遺構面-２)

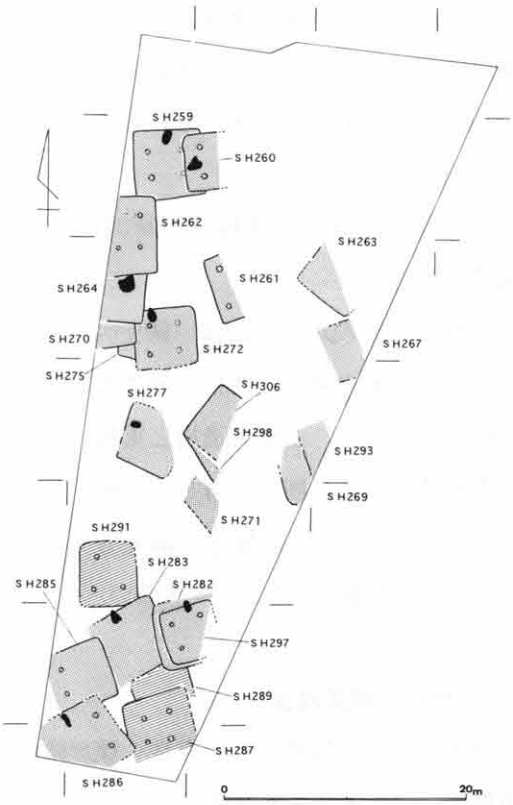
飛鳥時代前半の遺構には、竪穴式住居跡９基がある(付表２)。いずれも一辺4.5～５ｍ程の方形をなす。全体に遺存状況は悪く、深さ５～10cm程度が残っているに過ぎないものが多い。竈も、多くが削平を受けており、良好に確認できた例はわずかであった。時期的には、出土遺物からみて７世紀中頃を主体とするものと判断しているが、細かくみれば３時期程度のものが混在しているものと考えられる。

③古墳時代中期後半～後期(第４遺構面-３)

この時期の遺構としては、竪穴式住居跡を22基(付表２)確認した。ただし、遺構の重複が多く、明確に輪郭等を確認できなかったものも多い。本来はさらに多くの住居が存在したものと思われる。確認できたものでは、一辺５～６ｍ程度の隅丸方形をなすものが多い。また、重複



第３図　Ｅ地区第４遺構面遺構平面図(1)



第４図　Ｅ地区第４遺構面平面図(2)

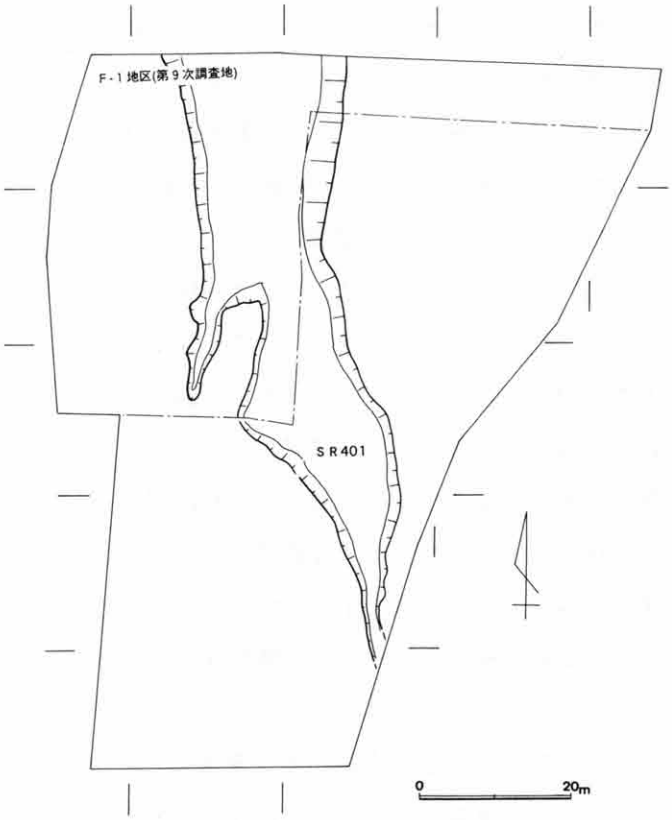
付表２　Ｅ地区第４遺構面竪穴式住居跡一覧

遺構名	形態	規模(南北×東西)	竈	時期	遺構名	形態	規模(南北×東西)	竈	時期
ＳＨ266	方形	4.6m×4.5m以上	東辺	飛鳥	ＳＨ270	方形	—	—	古墳
ＳＨ268	〃	—	西辺	〃	ＳＨ271	〃	—	北辺	〃
ＳＨ273	〃	4.5m×—	北辺	〃	ＳＨ272	〃	５m×5.1m	北辺	〃
ＳＨ276	〃	4.8m×4.5m	—	〃	ＳＨ275	〃	—	—	〃
ＳＨ278	〃	５m×５m	北西隅	〃	ＳＨ277	〃	4.6m×—	—	〃
ＳＨ279	〃	4.5m×4.3m以上	北辺	〃	ＳＨ282	〃	5.5m×—	北辺	〃
ＳＨ280	〃	5.2m×—	北辺	〃	ＳＨ283	〃	5.5m×—	—	〃
ＳＨ284	〃	4.7m×4.2m	—	〃	ＳＨ285	〃	4.9m×—	北辺	〃
ＳＨ288	〃	—	—	〃	ＳＨ286	〃	5.5m×—	北辺	〃
ＳＨ259	〃	5.5m×5.6m	北辺	古墳	ＳＨ293	〃	—	—	〃
ＳＨ260	〃	4.5m×—	—	〃	ＳＨ296	〃	4.8m×4.5m	西辺	〃
ＳＨ261	〃	5.5m×5.6m	—	〃	ＳＨ297	〃	4.4m×4.5m	北辺	〃
ＳＨ262	〃	6.5m×—	北辺	〃	ＳＨ298	〃	—	—	〃
ＳＨ263	〃	5.2m×—	北辺	〃	ＳＨ306	〃	5.2m×—	北辺	〃
ＳＨ264	〃	—	—	〃	ＳＨ287	〃	—	—	弥生末
ＳＨ267	〃	4.8m×—	西辺	〃	ＳＨ289	〃	—	—	〃
ＳＨ269	〃	—	北辺	〃	ＳＨ291	方形	5.3m×4.8m	—	〃

する遺構が多いため、竈が確認できなかったものや、焼土塊が壁際に認められるにすぎないものもある。無論、これら全ての住居跡が同一時期に併存していたとは考えられず、重複関係や出土遺物などからみると少なくとも３～５時期にわたるものが混在すると考えられる。

④弥生時代終末～古墳時代初頭(第４遺構面-４)

この時期の竪穴式住居跡は、調査区南辺付近で３基を確認したにとどまる(付表２)。ただし、上層各遺構と重複して存在するために削平が著しく、唯一、ＳＨ291が一辺５m前後の隅丸方形をなすことを確認できたにすぎない。



第５図　Ｆ地区第４遺構面平面図

(2) Ｆ地区の調査成果

Ｆ地区では、前回報告した奈良～鎌倉時代の遺構面は第３遺構面までであり、ここでは第４～６遺構面に関する調査成果を述べることとなる。時期的には弥生時代後期後半～飛鳥時代にわたるものであるが、検出遺構としては、各遺構面にわたって検出された流路跡及び第６遺構面で検

出した水田跡である。

①古墳時代後期～飛鳥時代(第4遺構面)

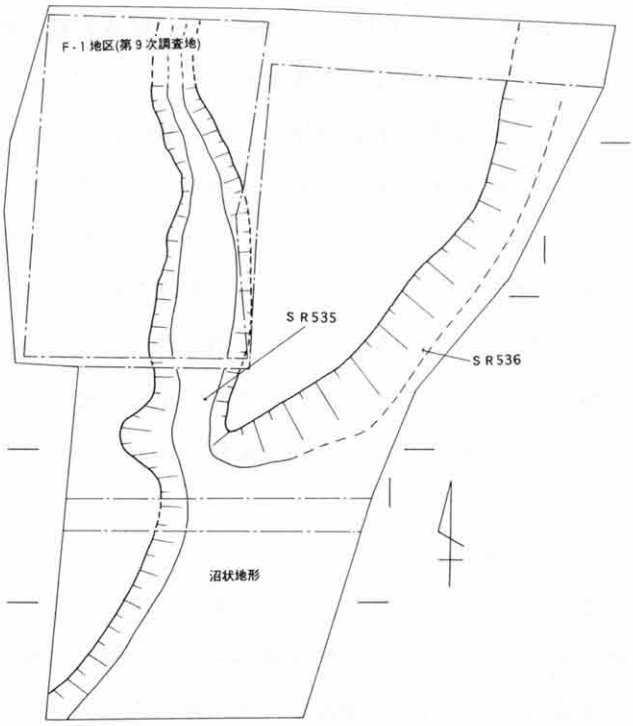
この時期の遺構には、第4遺構面で検出した流路跡がある。調査区を北西から南東方向に流れるもので、幅約20m、深さは最深部で約1mを測る。遺物は極めて少なく、6世紀末葉～7世紀頃の須恵器片がわずかに出土したにとどまる。その検出状況から、後述する流路跡(SR535)が最終的に埋没していった段階のものと判断している。

②弥生時代後期終末～古墳時代前期(第5遺構面)

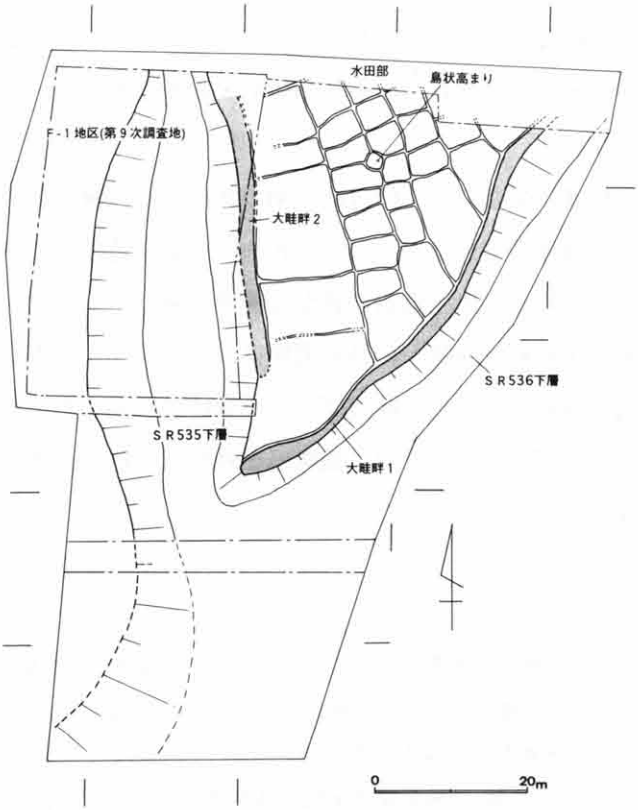
この時期の遺構には、2条の流路跡とこれが合流して形成する沼状地形がある。流路跡は、調査区の西辺部を南北に流れるSR535と東辺部を北東から南西方向に流れるSR536であり、調査区中央付近で両者が合流し南半部で沼状となる。SR536は西側の肩部を確認したにとどまるが、SR535は幅約15m・深さ約1.5mを測り、沼状部分は、幅20m以上・深さ約2m以上となる。いずれも、その埋土中から弥生時代後期終末～古墳時代前期の土器や木製品が出土した。

③弥生時代後期後半(第6遺構面)

第6遺構面の状況としては、第5遺構面で検出した流路並びに沼状地形はほぼ同一地点に存在し、2条の流路跡(SR535下層・SR536下層)に囲まれた調査区北東部の微高地上



第6図　F地区第5遺構面平面図



第7図　F地区第6遺構面平面図

に水田が形成されている、というものである。

水田跡は、標高10m付近に認められた暗灰色粘土層上面に形成されたもので、その直上は厚さ３～５cmの洪水砂によって覆われていた。洪水によって一気に埋没したものと判断された。このため、水田は廃棄された段階の状況を良好に残し、水田面では稲株痕と従来から認識されている径３～５cmの砂が充満した穴や足跡などが多数認められた。水田は、その東西両側にある流路に対して、幅約１m、高さ約0.2～0.4mの大畦畔を堤防状に造り、これに囲まれた平坦面を幅20～30cmの小畦畔で区切ることによって形成される。大小合わせ26面を確認したが、西半部分は遺存状況が悪い。その廃棄段階で小区画の水田が形成されていなかった可能性や、洪水による土砂が西側から流入したため消滅した可能性などが考えられる。なお、この水田跡の時期は、これを覆っていた洪水砂層中からの出土遺物をもとに弥生時代後期後半～終末に位置づけている。

３．まとめ

以上が、内里八丁遺跡第10次調査の下半期の成果である。この中で、最も注目すべき点は、Ｅ地区第４遺構面の弥生時代後期終末～飛鳥時代の竪穴式住居跡群(総数34基)の確認と、Ｆ地区第６遺構面の弥生時代後期後半の水田跡の確認の２点である。

前者に関しては、飛鳥時代のものが９基、古墳時代中期後半～後期のものが22基、弥生時代後期終末のものが３基という内訳になる。うち、古墳時代中期後半～後期及び弥生時代後期終末に関しては、北側に位置するＣ・Ｄ地区でもほぼ同時期の竪穴式住居跡群を検出しており、各時期とも総数30基をこえる数の住居跡を検出したこととなる。無論、各時期において全てが併存していたとは考えられないが、比較的大規模な集落が、それぞれの時期に形成されていたことは間違いない。

後者に関しては、ほぼ同時期の水田跡が当遺跡の過去の調査でもＡ・Ｂ地区で確認されており、今回は報告できなかったが、Ｅ地区の第５遺構面以下においてもこの時期の水田跡の存在が想定されている。出土遺物の細かな整理が進んでおらず、これまでに確認されている弥生時代後期終末の竪穴式住居跡との対応関係については、未だ不明な点も多いが、これによって居住区として利用された微高地の縁辺部に、比較的広範囲に水田が形成されていた当時の集落景観が復原されるようになった。また、稲株痕を残す水田跡は全国的にも希な調査例であり、非常に貴重な調査成果を得たといえるだろう。

（もりした・まもる＝当センター調査第２課調査第３係調査員）

注１　Ｇ地区の調査については、平成７・８年度に京都府京都文化博物館が調査を実施した。

注２　足利健亮『日本古代地理研究』　(株)大明堂　1985

注３　古瀬誠三・森下　衛・柴　暁彦「内里八丁遺跡第10次の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第67号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

12世紀の土器製塩炉跡

田代　弘

1．はじめに

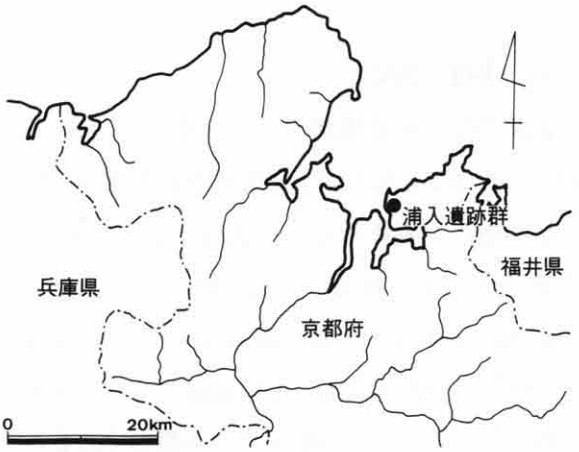
当調査研究センターでは平成７年度から、舞鶴市教育委員会と共同で舞鶴火力発電所建設予定地内に分布する浦入遺跡群の発掘調査を実施してきたが、平成９年度をもって終了した。この間の調査で、当遺跡群は縄文時代集落遺跡と奈良時代以降の塩生産遺跡を主体とする複合遺跡であることが判明した。製塩関連では奈良～平安時代の製塩炉跡や良好な遺物群を検出し、これまで知られていなかった若狭湾西岸地域の律令期の塩生産の一端が明らかになりつつある。

製塩に関する当センターの調査としては、平成８年度にＮ地点で検出した塩生産集団に関連する建物跡群、平成９年度にＡ・Ｏ地点で検出した建物跡群や土器製塩炉跡などが特筆される。平成９年度調査成果の一部は本誌第67号で報告したが(注1)、本稿では、その後の調査成果の中から、土器製塩の中で最も新しい段階に属する炉跡を取り上げて、検討を加えたい。

2．遺跡の位置

浦入遺跡群は、舞鶴市千歳小字池カナル他に所在する(第１図)。舞鶴市東部には、福井県に境を接して大浦半島がある。大浦半島は若狭湾の西端を占める宮津湾の東岸に位置し、舞鶴湾の湾口をなす。大浦半島は山地性の地形に富んでおり、宮津湾に面する外海の海岸線はリアス式の急崖が発達する。大浦半島の西縁、舞鶴湾口付近に浦入湾がある。浦入湾は通称松ヶ崎と呼ばれる砂嘴が海側に発達しているため、ラグーン状の穏やかな湾となっている。湾岸に縄文時代早期から鎌倉時代にかけての遺跡群が点在し、これらを総称して浦入遺跡群と呼ぶ。

浦入遺跡群の特徴は、周囲を海と山塊に閉ざされ、陸上交通において内陸部とは隔絶した位置にあることである。陸上交通の便が悪く、近年まで主要な交通手段としてもっぱら海上交通を用いていた。一方、海上交通によれば、陸上交通ではかなりの遠隔地となる由良川河口地域、宮津湾岸地域に容易に達することができることは注意すべきであろう。由良川下流域には奈良時代の掘立柱建物群が検出された志高遺跡や桑飼上遺跡(注2)、宮津湾岸には推定国府域を含む阿蘇海沿岸の遺跡群(注3)な



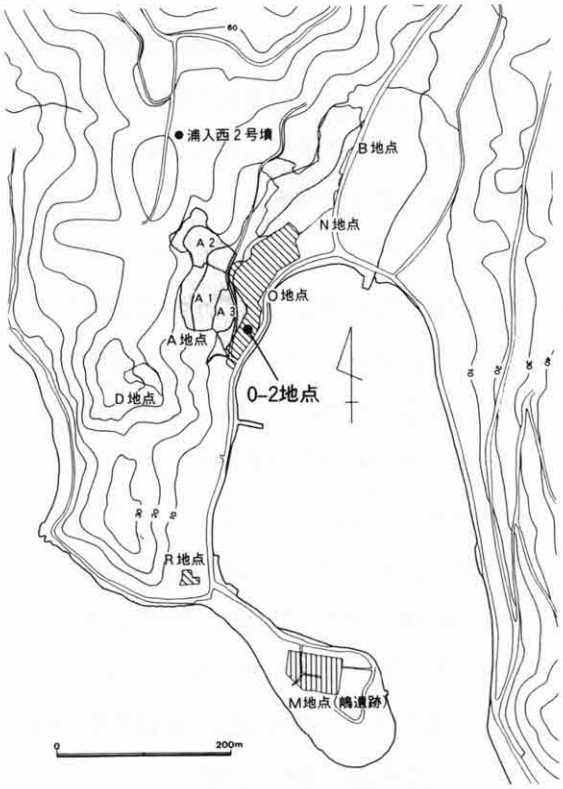
第１図　調査地位置図

ど、浦入遺跡群と関連深い律令期の主要遺跡が数多く分布しているからである。また、舞鶴湾口の博打岬沖は海流の変化が激しく、海難事故の多いところとして知られ、若狭湾航海者にとっての難所である。航海者にとって浦入湾は風待ちの港として大いに利用されたことだろう。浦入遺跡成立の要因の一つとして、こうした海上交通の利便性も考えられる。

3．浦入遺跡の概要

浦入遺跡群は、浦入湾に面した丘陵・海浜部に形成された遺構群である。舞鶴市教育委員会の分布調査と試掘により、18地点に遺跡の存在が予想され、それぞれA～R地点と名付けられた。発掘調査は舞鶴市教育委員会と当調査研究センターとで分担して行った。その結果、縄文時代早期末を最古とする縄文時代集落(P地点)、縄文時代の丸木舟(R地点)、奈良～平安時代の製塩作業場跡(Q・O地点)、製塩作業従事者の住居跡とみられるテラス状遺構(A・N地点) など、多くの成果が得られた。ここで言及する遺構(土坑SK01・02)は、O－2地点で検出したものである。

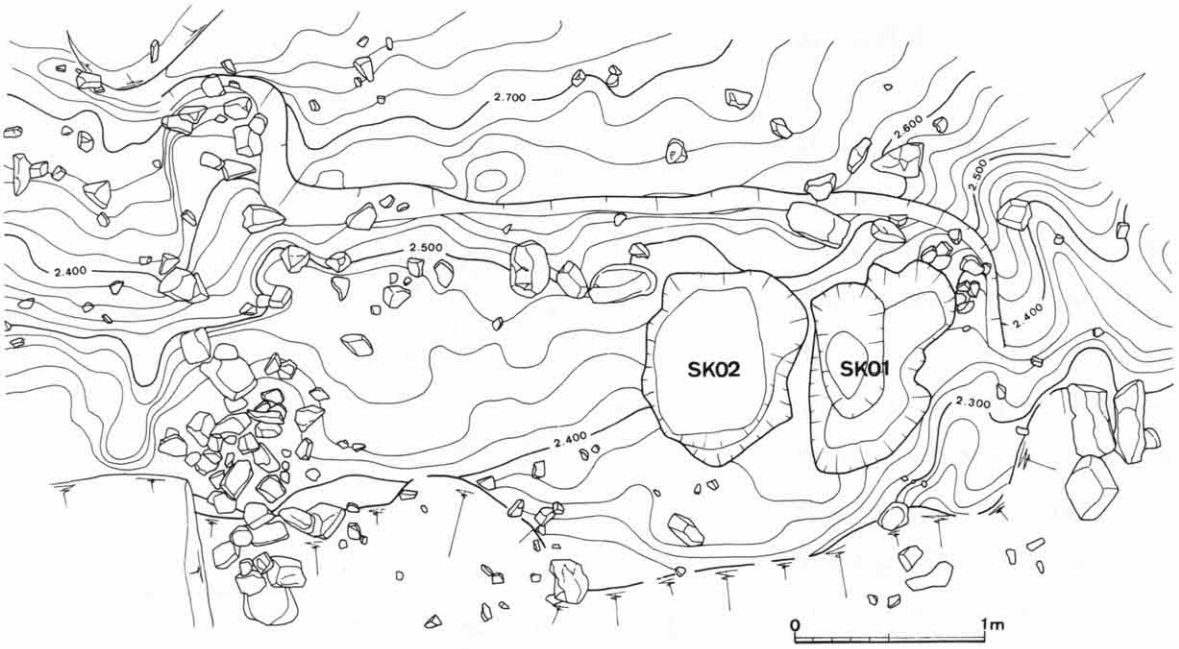
O－2地点は、浦入西岸の海岸部に位置する南北に長い調査地区である(第2図)。北半部をO－1地点、南半部をO－2地点と呼んだ。O－1地点では、奈良時代から平安時代の海岸線と製塩炉跡を検出し、O－2地点では、製塩炉跡や鍛冶炉群などを検出した。O－2地点は、汀に接する丘陵斜面に位置し、奈良時代前葉にこの斜面を大規模に造成して広い平坦面作り出し、土器製塩が行われた。製塩炉跡に重複して鍛冶炉跡が認められており、製塩に付随的に鍛冶作業が行われていた。その後、平安時代前期頃の地滑りによって奈良時代の遺構面が完全に埋没し、地滑り堆積物の上に平安時代末期頃の遺構面が築かれる。土坑SK01・02は、地滑り後の堆積土上に構築された遺構である。製塩炉は、焼土のみからなる地床炉とでもいうべきタイプ(A)と、敷石あるいは礫を伴うタイプ(B)に大別される。Bタイプは小規模なものが多い。奈良時代・平安時代を通じて両タイプが存続する。



第2図　浦入遺跡トレンチ配置図

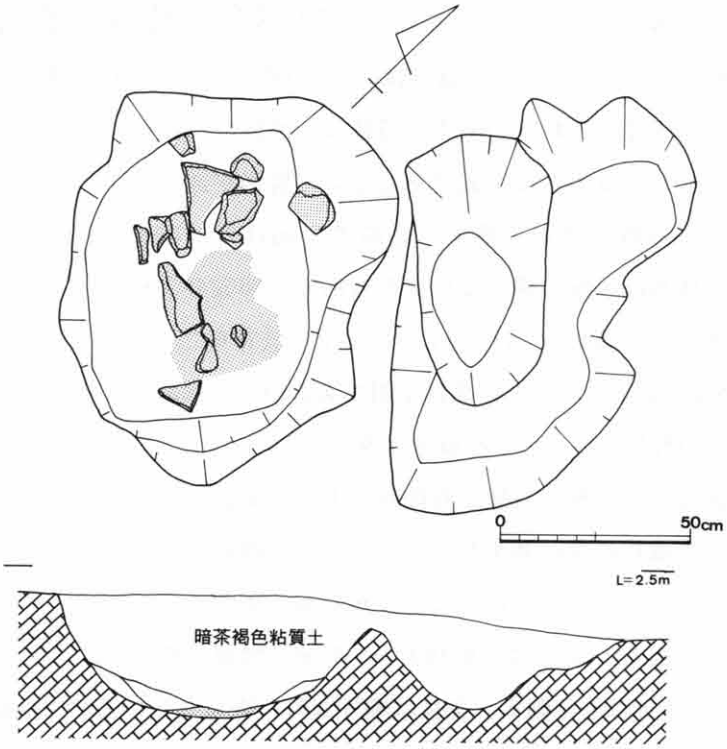
4．遺構と遺物

土坑の形状と堆積状況　土坑SK01・02は、地滑りによる堆積土の上に形成された素掘りの土坑である。長楕円形で、並列する。規模は、土坑SK01は主軸長1.21m・幅0.65m・深さ0.31m、土坑SK02は主軸長1.02m・幅0.75m・深さ0.47mを測る。断面形はともにU字形である。土坑SK01は縦に長く不整形であるのに対し、SK02は整然とした楕円形である。



第３図　O―２地点土坑（ＳＫ01・ＳＫ02検出状況）

土坑ＳＫ02の底部には、角礫が認められた。礫は平坦な面をもつ箱形のもので、平坦面を上にして土坑底面中央を囲むように配置されていた。土坑底面から礫上面にかけて製塩土器の集積がみられた。また、土坑底部と礫の一部に被熱して赤変した部分が認められた。土坑ＳＫ01底部には特に被熱したような痕跡は認められない。埋没状況は、土坑ＳＫ02底面の被熱部分を除くと、両土坑とも暗茶褐色土層（第１層）のほぼ一層で埋没している。暗茶褐色土層は、炭と微細な製塩土器破片を均質に含んでいる。この層からは、第７図に示すように、多数の製塩土器支脚が、黒色土器などの土器類とともに一括出土している。

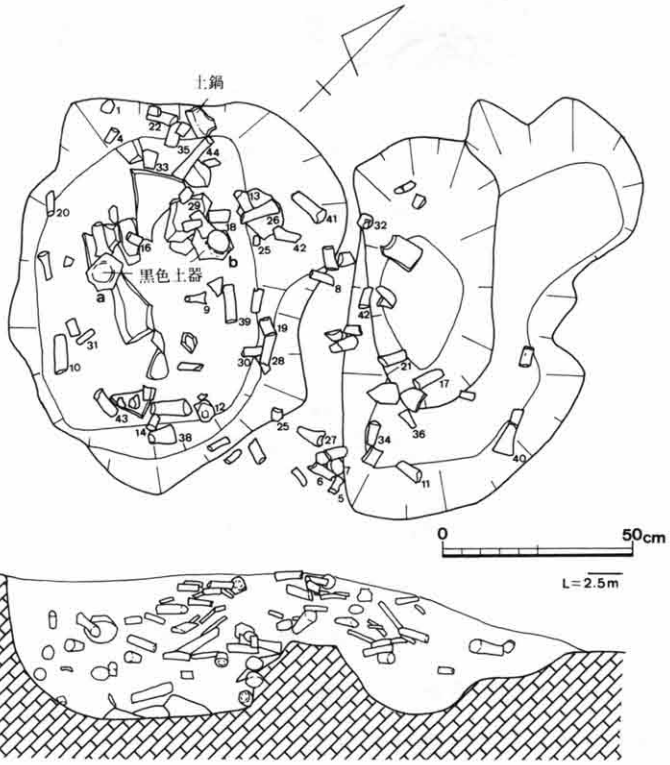


第４図　土坑ＳＫ01・02完掘状況（アミは被熱変色部分）

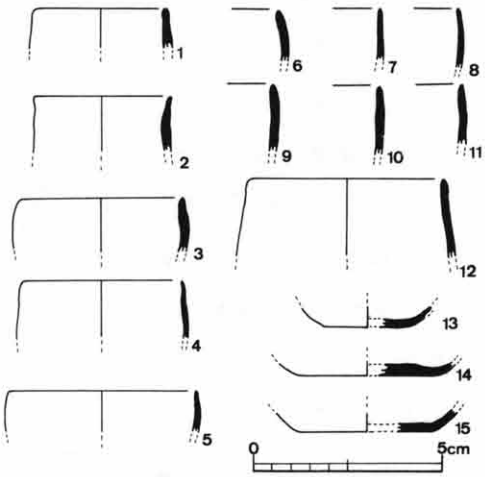
土坑出土遺物　土坑から出土した遺物は、製塩土器と若干の日常用器類がある。

製塩土器には、土器と、これをのせて支える土器支脚がある。製塩土器は暗茶褐色土にも多量に含まれていたが、微細片化していて部位が明瞭なものはほとんど認められなかった。ＳＫ02の底部付近に密集して検出したものが、遺存状況が比較的良好であったので、この観察結果を記す

ことにしたい。この資料は土壌を水洗して回収したもので、一辺が5㎜以下の細片が主体となっている。したがって全形を明確に示しうるほどの資料は得られず、図示可能な口縁部と底部のわずかな資料からの復元である。まず、色調であるが、黄土色～明橙色が主体であり、被熱に伴う酸化・還元によって赤色化したもの、灰白色～暗灰色化したものが多い。カルシウム化合物あるいはマグネシウム化合物とみられる製塩土器特有の物質が付着しているものもある。形態についてみると、口縁部は直口で内傾する傾向がある。器体は、直線的に立ち上がり底部は小さな平底であるという特徴が認められる。器壁は非常に薄く、底部で2㎜以下、口縁部・体部は1㎜に満たないものもある。卵殻のようである。法量は、口径約3.5～5cm・底径約2.5～3.6cmと推定される。器高は不明であるが、口縁部と底部の形状から6～7cm前後とみておきたい。



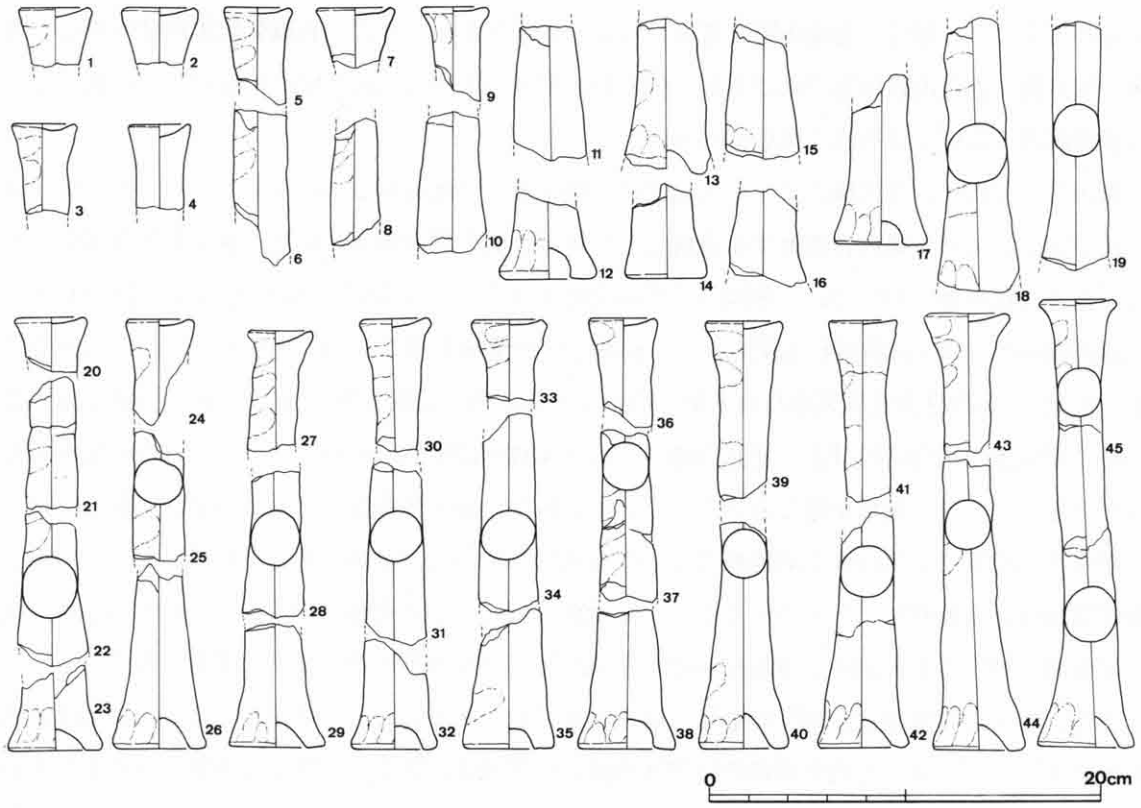
第5図　土坑ＳＫ01・02遺物出土状況図(番号は第7図土器番号)



第6図　土坑ＳＫ02出土製塩土器実測図

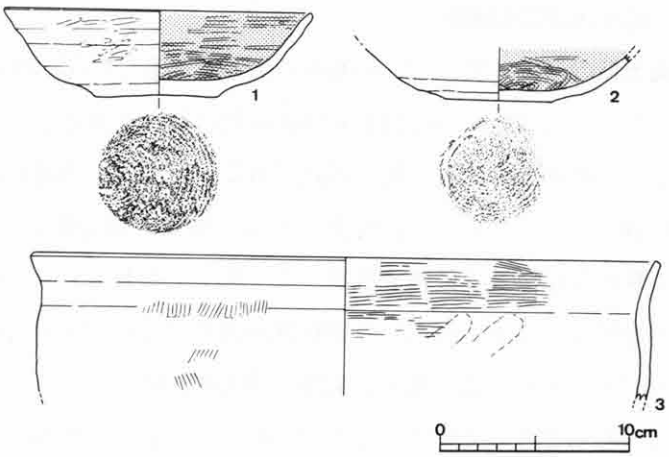
製塩土器支脚の形態的特徴は、上端を拡張してくぼんだ皿状の受け部を有していること、脚柱部が円筒状をなし、大変に長いこと、短く開く脚部をもつことである。受け部は直径3.5～4cm、脚部は直径4.5～5cm前後を測る。全長は細片資料に限られているので明確ではないが、後述するように近接地点で得られた完存例(第7図45)から22～24cm前後と推定する。支脚は全て脚柱部で折損し、脚柱部上下で壊れて3個になるものが多い。折損部には二次的な被熱による変色が著しいので、高温のために器体が崩壊したものらしい。接合する部位の傷みが激しく、接合できないものがある。胎土は均質で、黄褐色の素地に直径2～3㎜の石英の角礫を多量に含んでいる。

製塩土器類以外の遺物として、黒色土器椀・土師器鍋・須恵器甕など合計5点が出土しているが、須恵器甕は細片であり、図示しうるものは3点のみであった。黒色土器は3個体分ある。いずれも内面のみを黒色化し、ヘラミガキ調整する椀である。器体外面は器表面の状態が良くない



第７図　土坑ＳＫ01・02出土製塩土器支脚実測図

のではっきりしないが、口縁部付近をわずかにヘラミガキ調整するようである。第８図１（第５図ａ）はほぼ完形に復元できるもので、口径約16.2cm・器高約4.4cm・底径約6.4cmを測る。体部と底部境界に強くナデ調整がみられ、高台は明瞭に作り出されていない。同図２（第５図ｂ）は底部のみが遺存したものであるが、底部の作りは１と同様に粗略である。底径は約5.6cmである。土師器鍋は、口縁部の一部が残ったものである。口径約33.2cmである。体部外面をユビオサエ後、ナデ調整するが、器面に凹凸を残す。一方、内面は丁寧なハケ調整により平滑に仕上げられている。



第８図　土坑ＳＫ02出土遺物実測図

５．土坑ＳＫ01・02の性格と問題点

(1) ＳＫ02の性格

ＳＫ02は土坑底面に礫を配置し、その上で焼成を行った遺構である。土坑底面が被熱し炭や灰

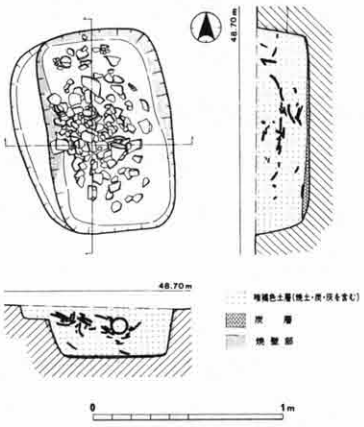
とともに製塩土器片が密集して廃棄されていること、埋土に数多くの製塩土器支脚が廃棄されていることなどから見て、製塩炉跡と考えられる。支脚を伴う小規模な石敷製塩炉跡は阿納塩浜遺跡や傾遺跡、吉見浜遺跡等で確認されているが、本例のように土坑を伴う例は無く、若狭湾岸の製塩遺跡群においては初出の形態である。

類例を挙げると、当遺構のように土坑底部に礫を敷いて焼成する例はみあたらないが、秋山浩三氏が内陸における焼塩に関連する遺構として掲げた次の例がある(注4)。京都市花園遺跡製塩炉ＳＸ191(注5)(奈良時代後葉)（第９図)、亀岡市千代川遺跡土坑ＳＫ４(古墳時代後期前半)、長岡京市下海印寺遺跡検出土坑(古墳時代後期前半)、木津町上津遺跡土坑ＳＫ548・土坑ＳＫ524(奈良時代中・後葉)、長岡京市長岡京跡右京五条一坊土坑ＳＫ27960(長岡京期)、向日市長岡京跡左京四条二坊二町検出土坑(長岡京期)。花園遺跡・千代川遺跡例は被熱して赤く焼けた土坑から製塩土器が出土したもので、焼塩炉跡と考えられている。他は、炭・灰を伴った土坑へ製塩土器が一括して投棄された例で、焼塩作業の過程で生じた廃棄物を片づけた遺構と推定されている。この場合、炉跡は近接地に存在したとみられるが、上津遺跡ではこうした遺構に近接して炉跡とみられる焼土坑が数基検出されており、焼塩用製塩炉と廃棄土坑のあり方を考える上で参考になる。

さて、ＳＫ02の性格は、細片の製塩土器を土坑に炭・灰とともに一括投棄すること、底面が被熱硬化するなど上述した内陸部の焼塩関連遺構との共通点がある。ＳＫ02は支脚を伴う製塩土器である点で他の例とは異なるが、検出状況の共通性から、ＳＫ02を焼塩炉と推定することは可能であろう。また、ＳＫ01は底部に焼土痕跡が認めらず、炉跡に付随する廃棄土坑とみたい。

(2) 出土遺物の位置付け

製塩土器の形式　次に、ＳＫ02から出土した遺物の年代観をみていこう。口縁部と底部破片の形状から、やや内傾する直口をもつ砲弾形の器形と推定された。これは、若狭湾岸地域で塩浜式と称される小形薄手土器と同一型式である。しかし、当該資料は厚さは２㎜前後で、塩浜式よりさらに薄く作られている点が注意される。製塩土器支脚もさらに長脚化した段階のものである。従来の編年では塩浜式に属するが、より後出する要素も見いだせる。この点を検討するには製塩土器廃棄層ＳＸ01から出土した完存例が参考になる。ＳＸ01はＳＫ02の近接地点に位置する製塩土器支脚集積であり、ＳＫ02と同時期と考えている。この中に唯一の完存資料があり(第７図45)、正確な形状と法量を知ることができる。これについての観察所見を記すと、器高22.8cm・底径5.0cm・頂部径約4.0cmで、脚柱部の最も細い部分の径は2.2cmを測る。頭頂部は端部を拡張して、上面を凹面に作る。脚柱部は長く、細い。脚柱外面には成形の際の指頭圧痕が顕著に残されている。脚部は、緩やかに開き、底面を凹ませて輪状の脚台とする。接地面は、底部凹面は脚柱部側面が未調整であるのとは対照的に、丁寧なナデ調整が施されるのが特徴的である。



第９図　京都市花園遺跡の製塩炉

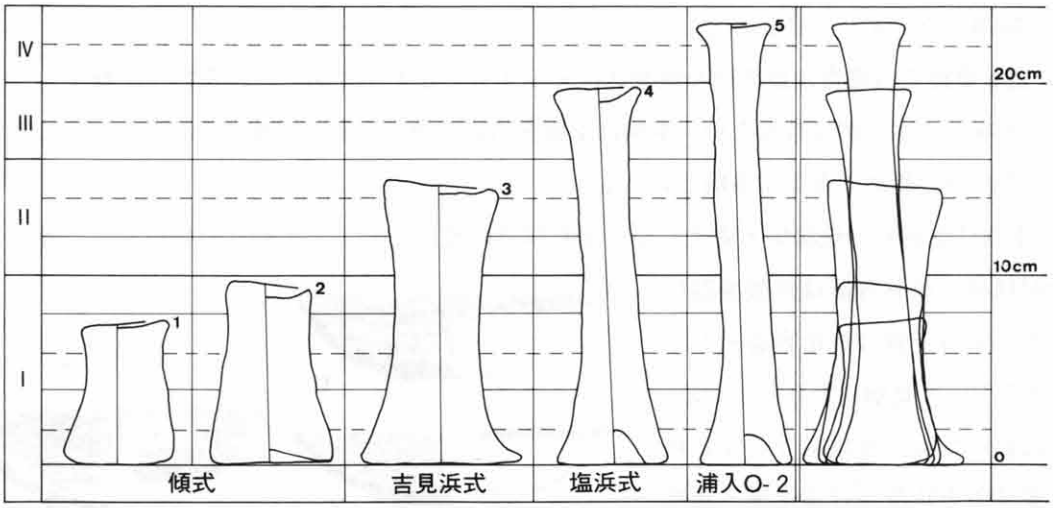
浦入遺跡群において上述したような特徴を有する製塩土器・製塩土器支脚を、浦入O－2地点式と呼ぶことにしたい。それでは、この型式は若狭湾岸の製塩土器編年のなかでどの段階に位置づけられるかを、次にみていくことにしよう。

若狭湾における当該資料の位置　福井県小浜市域を中心とする若狭湾岸では、同志社大学の調査を端緒として若狭考古学研究会・地元教育委員会など各団体の精力的な調査によって、古墳時代前期から平安時代後期に至る製塩土器群の変遷が見通された。(注6) これらの成果をふまえて森川昌和・大森　宏両氏により総括的な編年案が提示され、(注7) 入江文敏氏は古墳時代史研究の立場から研究を深化させている。(注8) これらの成果を簡単にまとめると以下のようになろう。

若狭の製塩土器は、5世紀前後の丸底に短い脚のついた浜禰Ⅰ式に始まり、6世紀前後に浜禰ⅡA式と呼ばれる薄手の小形丸底の製塩土器へと変化する。浜禰ⅡB式、岡津式などの中型丸底土器を経て、7世紀末から8世紀に船岡式と呼ばれる平底の大型製塩土器が成立する。船岡式製塩土器の出現は律令制下での専業的塩生産組織を背景としており、初めて平底が採用され法量は製塩土器史上最大となる。9世紀には製塩土器は急速に小型化し、製塩土器支脚を伴う製塩が本格化する。9世紀前・中葉を中心に傾式、9世紀後葉～10世紀前葉を中心に吉見浜式、10世紀後葉から11世紀前葉に最終型式である塩浜式土器が現われる。傾式・塩浜式土器の支脚は、製塩・焼塩のどの段階で用いられたものであるかわからないが、塩浜式は小型薄手の製塩土器であり支脚が長く不安定であることから焼塩専用と位置づける意見が有力である。(注9) 製塩土器支脚出現以降の製塩土器は、小型化、支脚の長脚化が型式認定の鍵になる。

製塩土器支脚についての考察は、若狭考古学会による吉見浜遺跡調査報告書にある。この中で、傾式の器高が8～10cm、吉見浜式が15～16cm、塩浜式が18～20cm前後にまとまりをもつことが確認され、型式変化のメルクマールとして長脚化がもっとも重要と考えられた。(注10)

第10図は吉見浜遺跡で標識的に用いられた資料に、浦入O－2地点式を加えて図としたもので



第10図　製塩土器支脚型式変遷図（1～4は『吉見浜遺跡』1974より）
1.福井県小浜市傾遺跡採集　2.福井県小浜市阿納塩浜遺跡出土　3.福井県小浜市傾遺跡採集
4.福井県小浜市阿納塩浜遺跡出土　5.京都府舞鶴市浦入遺跡O－2地点土器溜まりSX01

ある。これをみると、塩浜式段階で傾式の２倍近くの器高をもつに至ること、吉見浜式以降は脚柱部が極端に細くなることが確認できる。浦入Ｏ－２地点式についてみると、頭頂部や底部の形状は塩浜式と良く似ているが、これより３～４cm以上も器高が高く、脚も細い。塩浜式よりさらに長脚化していること、先に記したように製作手法が粗略であることなどから、当型式は塩浜式に後出する型式であると予測できる。では、共伴遺物からみた年代観はどうであろうか。

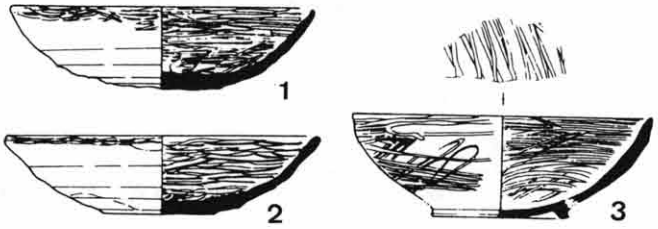
共伴土器からみた製塩土器の年代観　土坑ＳＫ02埋土からは製塩土器・製塩土器支脚に伴って黒色土器と土鍋が出土している。製塩土器と日常什器類が土坑内から一括して出土した稀少な事例であり、土器の相対年代によって製塩土器の年代を検討しうる貴重な資料である。黒色土器椀はいずれも、上述したような特徴から第Ⅲ段階第２型式[注11]に属するものと考えられる。黒色土器第Ⅲ段階を12世紀とする見解は早くから示されているが、近年、加悦町桜内遺跡ＳＥ03で第Ⅲ段階第２型式の黒色土器と丹波型瓦器椀の共伴事例が確認され、伊野近富氏により12世紀中頃と位置づけられた[注12]。桜内遺跡ＳＥ03の年代観を支持する例として、桜内遺跡ＳＥ01・02出土資料、舞鶴市行永遺跡の井戸跡出土資料を挙げることができる。桜内遺跡ＳＥ01出土資料は、共伴する白磁椀・東播磨系須恵器鉢などの年代から12世紀中葉から後半に位置づけられるものである[注13]。行永遺跡の井戸跡出土資料は焼土を伴う一括廃棄例で、第Ⅲ段階第２型式の黒色土器を主体とする好資料である。黒色土器は古相の丹波型瓦器椀・土師器皿・白磁椀・土鍋などからなり、各土器編年観を参考として吉岡博之氏は12世紀中頃の年代観を与えている[注14]。これらの例から、浦入遺跡Ｏ－２地点式製塩土器の暦年代を12世紀中頃と推定する。

６．まとめと課題

本稿では、遺構と出土遺物の検討から、土坑ＳＫ02を焼塩炉跡と考えた。また、土坑にともなう製塩土器、特に製塩土器支脚について、若狭湾岸地域で製塩土器の最終型式に位置づけられる塩浜式より後出要素を認め、浦入Ｏ－２地点式と名づけ、共伴土器から12世紀中頃に位置づけた。次に、問題点をを記してまとめとしたい。

(1)製塩遺跡での遺物は最終的な廃棄状況を示すものが大半であり、使用状況を推定しうるような出土状況を示す例は数少ない。本例は支脚を用いる製塩土器の明確な炉跡として、共伴資料も明らかな点で極めて重要な事例といえる。

(2)本例は類例から焼塩炉と考えたが、それ以外の理由として、塩浜式の盛行するとみられる11世紀以降、煎熬容器は鉄製容器に代替され製塩土器は焼塩容器として特化するという見解[注15]にひかれている。現場においても、焼塩に先行する粗塩生産段階を特徴づける遺構・遺物を認めることができなかったからである。しかし、浦入遺跡では塩浜式



第11図　桜内遺跡ＳＥ03出土遺物(1/4)
１・２.黒色土器椀　３.瓦器椀

以降の膨大な量の製塩土器が回収され、一般的な廃棄状況が煎熬用とされる製塩土器と何ら変わることがなく、遺物の全体的な出土状況からみると、塩浜式以降の製塩土器の主たる用途が煎熬容器でなかったとは言い切れない状況もある。土坑ＳＫ02の性格を他の地区で検出した同時期の炉跡の構造や製塩土器の観察などを通じて、さらに検討を深めていきたい。

(3)これまでの研究では若狭湾岸の製塩土器の終末型式は塩浜式とされ、土器製塩の終末時期は塩浜式の盛行する10～11世紀代である、と漠然と推定されてきた。時期が明確でないのは生活遺物の共伴が明確でなかったことによるが、今回、塩浜式に後出する浦入Ｏ－２地点式が確認され、共伴遺物の相対年代観をふまえて12世紀中頃という暦年代を付与することができた意義は大きい。浦入Ｏ－２地点式は、12世紀代に若狭湾西端に位置する大浦半島でのみ盛行した偏在的な型式であるとする見方もできるが、型式的に塩浜式と連続するものであり、古代からの土器製塩の中心地域である若狭地域(小浜湾沿岸)においてもその存在を推定することは容易である。したがって、若狭湾における土器製塩の終末時期は、従来より一世紀新しく、丹後型黒色土器第Ⅲ段階第２型式の盛行する12世紀中頃以降とみるのである。

(4)浦入製塩遺跡は、奈良時代前半に始まり、平安時代前期頃以降に生産規模が拡大し、塩浜式・終末の浦入Ｏ－２地点式まで断続的に生産を行っている。成立時には阿蘇海沿岸の推定官衙地域との関連が濃厚である。また、吉見浜式の製塩土器支脚に『笠百私印』という木印による刻印があることから、平安時代には笠氏という私的集団が生産に関与したことが知られる。承和十一(844)年に丹後国司となった笠数道との関連も注目されるところである。[注16]

(5)塩浜式・浦入Ｏ－２地点式が盛行する11世紀～12世紀は、権門・社寺に荘園が集中し、生産手段・労働力の私的所有が著しくすすみ、「古代律令体制に代わり家産的な中世の支配体制が確立し、手工業生産や流通が中世的秩序に再編」される時期と位置づけられる。こうしたなかで、手工業生産者も権門領主に従属するようになり、貢納生産と商品生産の両方を行う自立的経営をもった存在へと身分を変える。[注17] 塩浜式は、遺跡所在地の多くが寺社領荘園となっていることなどから「宗教儀礼用として伝統的な技法による塩づくりが保存されたもの」とみられている。平安末期における浦入遺跡の塩生産活性化の背景を明らかにするためには、本例を律令制的貢納生産の遺例と位置付けるのみではなく、荘園公領制下の塩浜における労働力編成のあり方を問う視点が、不可欠であろう。松尾寺・金剛院・多禰寺など古代から存在する近在の有力寺院をはじめ、荘園との関連や、阿蘇海沿岸の官衙地域の動向等を念頭において検討を進めていきたい。浦入Ｏ－２地点式は製塩土器を中世的土器生産の視座から検討しうる資料としても、貴重なものである。

(たしろ・ひろし＝当センター調査第２課調査第２係調査員)

注１　筒井崇史「浦入遺跡群Ａ地点の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第67号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

注２　細川康晴「第６節　奈良時代の掘立柱建物跡について」(『桑飼上遺跡』京都府遺跡調査報告書第19冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注３　真下八雄「第四章　奈良・平安時代の郷土　第１節　律令制下の丹後国」(『舞鶴市史・通史編(上)』

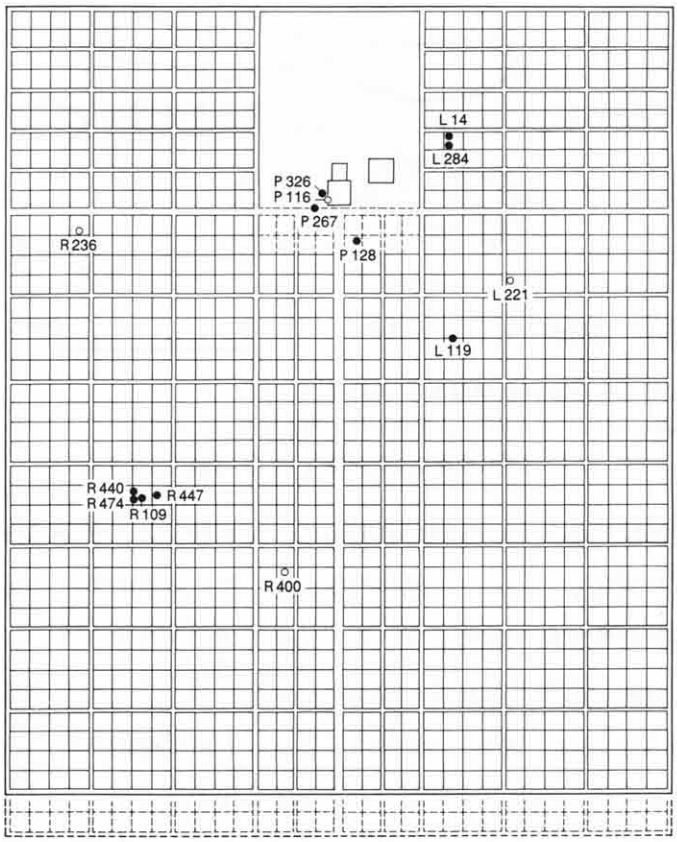
舞鶴市役所）　1993
注４　秋山浩三「8　京都府(丹波・山城)」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』　青木書店）　1994
注５　平良泰久ほか「平安京跡(右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第１分冊　京都府教育委員会）　1981
注６　『若狭大飯－福井県大飯郡大飯町考古学調査報告－』　福井県大飯町　1966
『浜禰遺跡－若狭大島半島土器製塩遺跡調査概報－』　若狭考古学研究会・大飯町教育委員会　1971
森　浩一・石部正志・堀田啓一・白石太一郎・大野左千夫『福井県田烏湾における古代漁業調査報告　若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』1971
『阿納塩浜遺跡』　若狭考古学研究会・小浜市教育委員会　1972
『吉見浜遺跡－若狭における土器製塩遺跡の研究－』　若狭考古学研究会・大飯町教育委員会　1974
『小浜市埋蔵文化財分布図』　小浜市教育委員会　1977
大森　宏・森川昌和「若狭の土器製塩」(『考古学雑誌』第64巻第２号）　1978
石部正志「原始・古代の土器製塩」(『講座・日本技術の社会史』２　日本評論社）　1985
『大島浜禰・宮留遺跡』(『大島宮留遺跡調査概報』若狭考古学研究会研究報告６　若狭考古学研究会）1986
注７　大森　宏・森川昌和「若狭の土器製塩」(『考古学雑誌』第64巻第２号）　1978
大森　宏・森川昌和「Ⅳ-４　福井県(若狭)」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』　青木書店）　1994
注８　入江文敏「若狭における古墳時代土器製塩についての覚え書き－大飯町大島浜禰・宮留遺跡の発掘調査から－」(『大島浜禰・宮留遺跡』　若狭考古学研究会）　1986
入江文敏「古墳時代土器製塩の画期と首長墓の動向」(横田健一先生古稀記念『文化史論叢』(上）創元社）　1987
入江文敏「土器製塩技術の系譜(予察)－古墳時代後半期のトライアングル－」(『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』　関西大学）　1993
注９　大森　宏・森川昌和「神事用の塩作り塩浜式」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』　青木書店）1994．ｐ612
注10　「3　製塩支脚について」(『吉見浜遺跡－若狭における土器製塩遺跡の研究－』　若狭考古学研究会・大飯町教育委員会）　1974
注11　竹原一彦「丹後における黒色土器について」(『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987
注12　伊野近富「②平安～鎌倉時代の遺物」(「国道176号関係遺跡発掘調査概要　(3)　桜内遺跡」『京都府遺跡調査報告』第54冊　(財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1993
注13　鋤柄俊夫「丹後(京都北部)」(『共同研究　中世食文化の基礎的研究』(国立歴史民俗博物館研究報告第71集　国立歴史民俗博物館）　1997
注14　『京都府舞鶴市行永遺跡発掘調査概報』　舞鶴市教育委員会　1991
井戸出土資料を舞鶴市教育委員会吉岡博之氏に見せていただいた。
注15　石部正志「6　製塩遺跡」(『考古資料の見方＜遺跡編＞－地方史マニュアル５－』　柏書房）1983．ｐ242、および注９と同じ。
注16　吉岡博之「丹後の土器製塩－舞鶴市浦入遺跡発掘調査成果から－」(『シンポジウム　製塩土器問題－古代における塩の生産と流通－』　第9回　塩の会）　1997
注17　橋本久和「中世社会と土器研究」(中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社）　1995
脇田晴子「中世土器の生産と流通」(中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社）　1995
＊　第９図は「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第１分冊　京都府教育委員会）　1981．p.152

長岡京の鋳造用溶解炉をめぐって
―鋳鉄鋳物生産の様相―

野島　永

1．はじめに

近年、山中　章氏によって長岡京における金属生産関連の遺構･遺物の集成が行われた。(注1) 以後、長岡京右京六条三坊における鋳造関連遺構・遺物の検出が続いた。屋上に屋を架すことになるが、筆者等の調査によって出土した炉壁・羽口の紹介を行い、長岡京の鋳造生産に関連する資料を概観する。なお、今回取り上げた炉壁・羽口のなかには、細片であることや、金属学的分析が行われていないために鋳銅・鋳鉄・鉄精錬などといった作業内容を明言し難いものが含まれている。資料の周知と類例の集成を目的としていることから、鋳鉄鋳物生産に関わる可能性のある炉壁・羽口を提示した。



第１図　長岡京における鋳造生産関連遺物出土地点
（黒丸；炉壁･大形羽口等出土地　白丸；鋳鉄鋳物製品出土地）
（Ｐ；宮城　Ｌ；左京域　Ｒ；右京域(数字は調査次数)）

2．長岡京における鋳造関連遺構と遺物

(1)長岡京右京六条三坊七町(右京第440・474次調査)における炉壁片と羽口(第２図・写真)

右京第440・474次調査は、都市計画道路石見下海印寺線の街路改良工事に伴う発掘調査であり、平成５・６年に当調査研究センターが実施した。(注2) 調査地は京都府長岡京市天神１丁目に所在する。ともに六条三坊七町の北西に位置しており、(注3) 炉壁片や羽口を出土した。右京第440次調査では、第２トレンチ土坑ＳＫ44023・ＳＫ44024とその周辺で出土している。また、右京第474次調査では、第１トレンチＳＤ474102上面から出土している。いずれも長岡京期と考えられる。第２図に、その一部を図化した。

第２図　長岡京右京六条三坊七町出土炉壁および羽口（１/４）
１～３・８．右京第474次調査ＳＤ474102　　４・６．右京第440次調査ＳＫ44023周辺
５．右京第440次調査ＳＫ44024　　７．右京第474次調査１tr.包含層

第２図１は、炉上半部、羽口より上の部位であろう。ＳＤ474102出土。左右長、およそ18.5cm。壁厚４cm内外。炉内面が海綿状に多孔質に変化している。下部は内壁が黒いタール状のガラス質に溶融変化している。一部に橙褐色を帯びた酸化鉄が付着している。外壁はスサが含まれ、一部剥落している。炉壁片の横方向の湾曲から炉の直径はおおよそ40cm程になろうか。２も炉上半部であろう。ＳＤ474102出土。左右長、およそ19cm。壁厚3.5cm内外になる。上端は輪積み成形の接合面が剥離したものと思われる。１のように、内壁の海綿質のような多孔化が進んでいないため、熱源からより遠い部位であったと思われる。下半部の一部がタール状に溶融し、橙褐色の酸化鉄が凹部に付着している。１よりも壁厚が厚く、湾曲が著しい。復原されうる炉の直径は30cm以上になろう。３も炉上半部の一部であろう。ＳＤ474102出土。図の上下長で10cm。壁厚2.5cm。

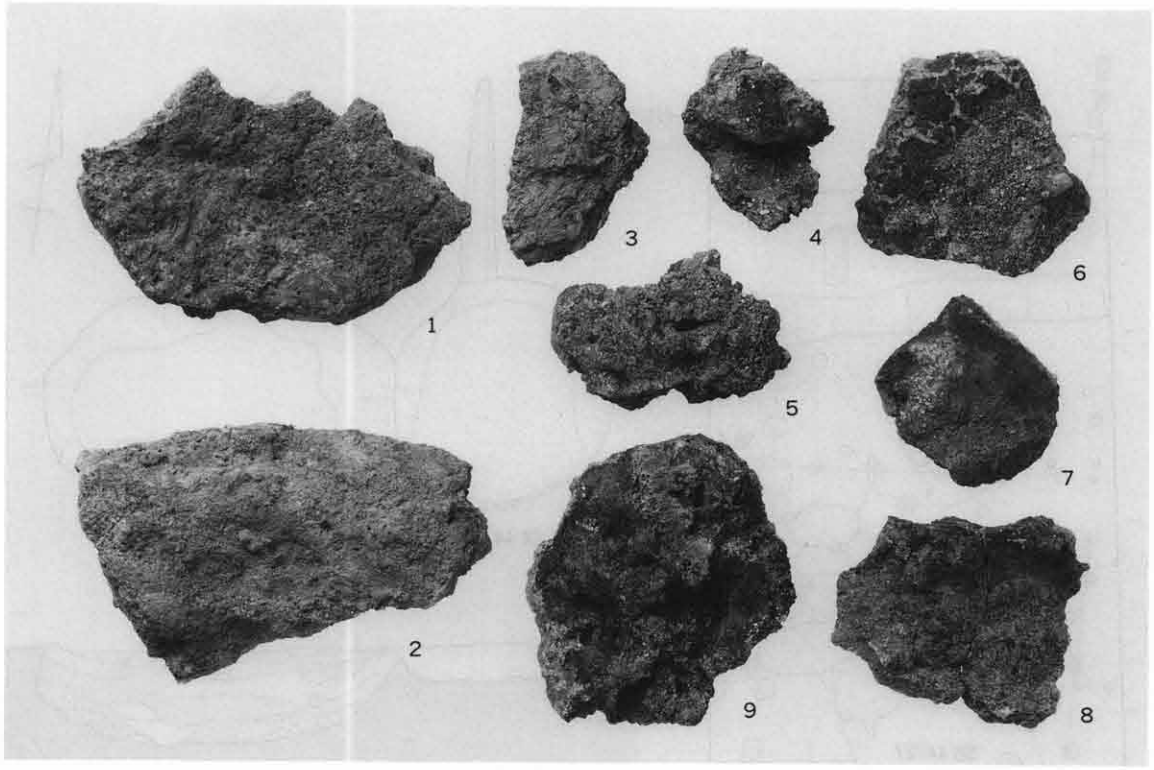
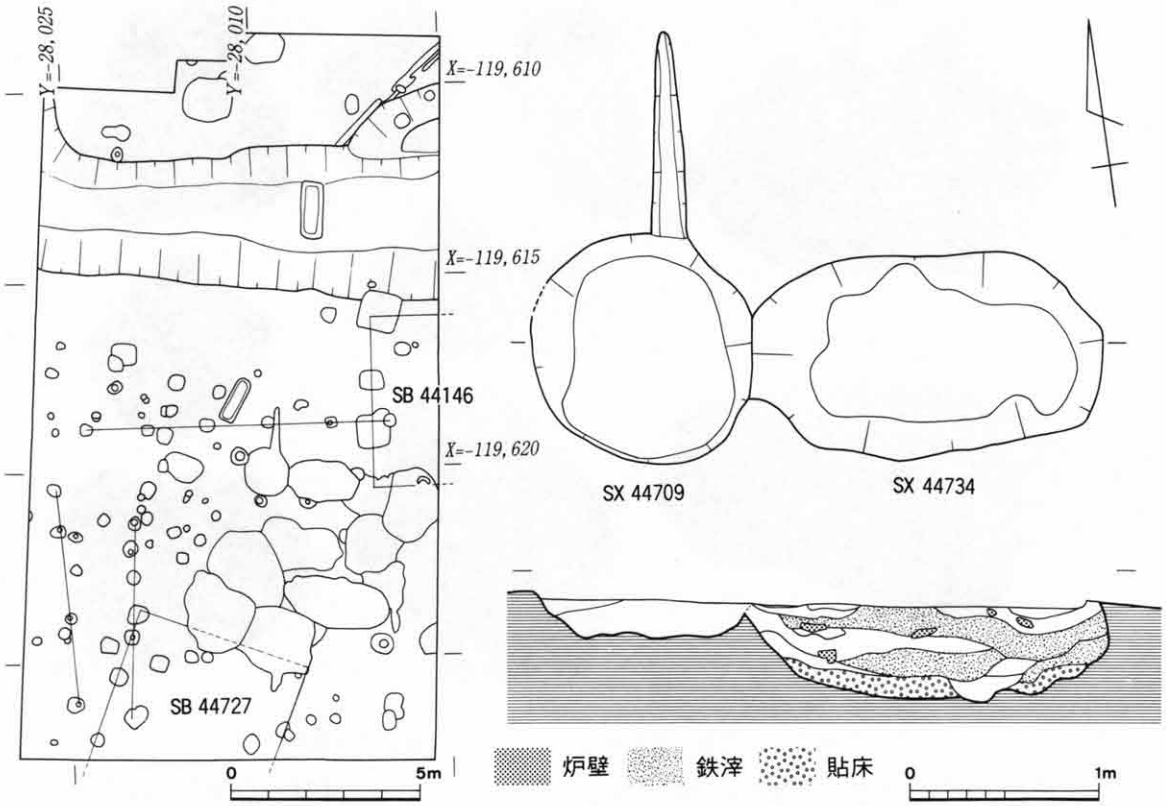


写真　長岡京右京六条三坊七町出土炉壁・羽口(第２図の番号と対応)

上下は不明である。外壁面に厚さ１cmほどスサを塗り込めている。４は、小形の羽口である。ＳＫ44023周辺出土。先端に近い部分と考えられる。送風に支障をきたすほど、内面上半の溶融が著しく、滴下しそうになっている。羽口外面は上半部分であったために、それほど溶融・熱変化は認められない。５は、大口径の大形羽口(大寸)である。ＳＫ44024出土。内径が11cmほどに復原できる。外面は羽口下半部であるために、タール状の溶融が著しい。内壁部にスサが塗り込められている。６も大形羽口である。ＳＫ44023周辺出土。やはり内径が11cmほどに復原できる。上半から横側にいたる部分であり、下にいくに従って溶融の度合いが著しくなる。７も同様に大形羽口と考えられる。第474次調査１トレンチの近代水田の床土包含層出土。炉内に突き出した羽口の下半部であり、炉壁と接触していた部分と考えられる。８は、大形羽口か。ＳＤ474102出土。先端部分がタール状に溶融し、滴下しそうになっていることや、横方向にわずかに湾曲していることから、大口径の羽口先端部下端と考えたが、復原口径が著しく大きくなるため、炉壁片の可能性もある。９は、炉下部にあたる。ＳＤ474102出土。上下の長さ、13cm。復原しうる径は15cm前後であり、上記の炉壁片と比べて小さい。炉壁片の内面は著しく溶融しており、壁厚もかなり薄く侵蝕されている。溶融部分の気泡が発砲した痕跡によって上下方向が判別できる。また、内壁面の凹部には橙褐色の酸化鉄が付着している。輪積み状の接合部から外壁面にまで溶融がおよんでいる。甑炉であれば、鐳の一部分にあたるのかも知れない。これらの炉壁内面には、酸化鉄の付着が著しく、銅滓が肉眼では認められないことや、円筒状の炉形が想定できることから、鉄鋳造用溶解炉とその羽口の一部とみることができる。

右京六条三坊七町では、このほかに右京第109次調査(注4)においても、炉壁集積遺構ＳＸ10903から、長岡京期の炉壁片が出土している。どのような用途(製錬・精錬・溶解)の炉か、限定する公表資



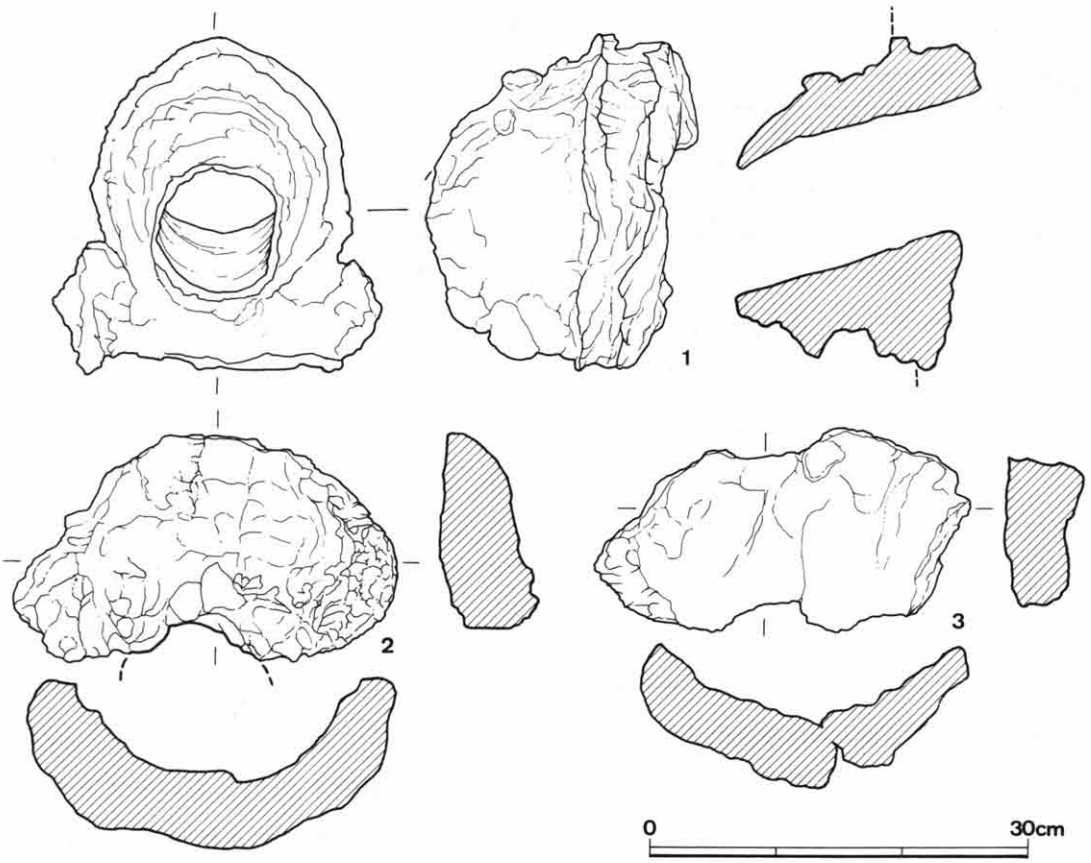
第３図　長岡京右京六条三坊二町鋳造関連遺構(右京第447次調査)(注５文献第８･11図を改変)

料に乏しい。調庸にあてられる鉄・鍬生産の確立と、後の安価な畿内鉄価格(鉄１廷５束(「延喜主税式」禄物価法))からすれば、京内での鉄製錬を想定しがたいことから、精錬もしくは溶解炉の可能性が高いであろう。

(2)右京六条三坊二町における鋳造関連遺構・遺物(第３・４図)

七町の東側、右京六条三坊二町では、右京第447次調査において、鋳造関連施設とされる遺構が検出されている(注5)(第３図左)。それは、12基の円形あるいは楕円形に近い平面形の土坑である。報告によれば、これら12基全てが竪形炉を据え付ける半地下式施設とされているが、遺構断面図からは、鉄滓層の堆積があり、炉壁片などが多く出土する土坑(第３図ＳＸ44734他)と、鉄滓層がみられず、北あるいは南側に伸びる溝を付設する土坑(第３図ＳＸ44709他)の二者が認められる。鋳造関連遺構には、甑炉などの溶解炉およびその下部に掘り込まれる基礎構造のほか、鋳込みの作業場や排滓場、鋳型の廃棄坑(場)などがあり、本例も前者が鋳込みの作業場、後者が溶解炉の基礎構造掘形と見ることもできよう(注6)。とすれば、炉の基礎構造からのびる溝状遺構は、送風に関係する施設溝ではなかろうか。また、これらの鋳造施設の周辺にある掘立柱建物ＳＢ44146やＳＢ44727は、鋳造関連土坑群との切り合い関係や柱掘形に炉壁片が投入されていたことから炉の操業期間中に設置された可能性が高く、鋳型の製作や製品の研磨調整などの作業が行われていたとも想像できる。排滓場は検出されていないが、六条三坊二町から七町の南半に広がる開析谷に、炉壁や鉄滓・鋳型などを投棄していたのではなかろうか。

第４図は、右京第447次調査の鋳造関連遺構から出土した炉壁片および羽口である。羽口の内



第４図　長岡京右京六条三坊二町出土炉壁・羽口（右京第447次調査）（1/6）

径は9.5～11.0cm前後に収斂する。炉の内径は24cm前後に復原されるが、ややいびつで正円にはならない。内径10cmを越える大形羽口や直径30cmほどの円筒形に復原できる弧状の炉壁片は、先述した右京第440・474次調査の炉壁や羽口の規模と類似しており、ともに円筒形自立炉と考えることができる。本例も、炉壁付着物の分析結果[注7]を考慮すれば、鉄鋳造用溶解炉の可能性が高いものと見て良かろう。

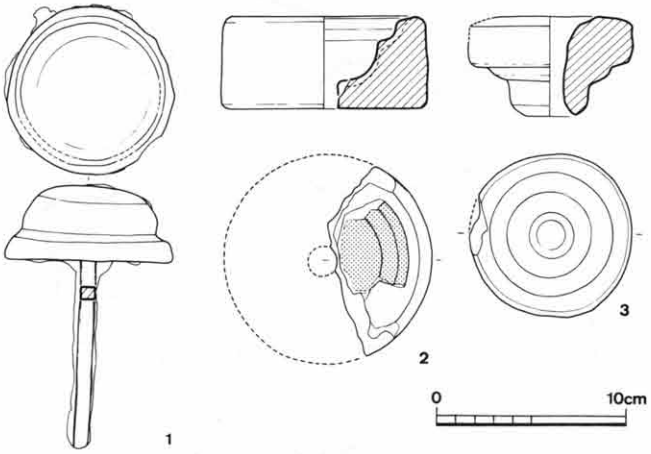
(3)長岡宮周辺における鋳造関連遺構・遺物

さて、長岡宮城周辺においても、鋳造施設の存在を示唆する炉壁や大形羽口・鋳型が出土している。なかでも内裏南方官衙、第１次春宮坊の主工署で操業されたとされる円筒形自立炉が、宮第128次調査で出土した[注8]。「東宮職員令」には、「木土耕作。及銅鉄雑作事」とあり、鋳造による鋳鉄鋳物生産の可能性も捨てきれない。炉壁体は、整地層から出土したもので現位置をとどめてはいないが、近辺での操業を考えて差し支えあるまい。

また、宮城東面街区、官衙町にあたる左京二条二坊八町では、左京第14次調査において炉壁や雨壷の鋳型、鞴羽口、多量の鉄滓などが出土している。炉壁は、直径50cm足らずの粘土紐の巻き上げ痕跡が明瞭に残る椀型の底部である。甑炉の鐳に似ており、鉄鋳造用溶解炉とされる。鋳型は、雨壺鋳型36点（雄型10・雌型26）と用途不明の直方体状の鋳型断片があるとされる[注9]。朝堂院西第四堂南面回廊の雨落溝の排水溝（ＳＤ1606）から鋳鉄鋳物の雨壺が出土しており（宮第116次調査）、雨壺鋳型も、それとほぼ同規模のものであることから（第５図）、鉄鋳造用鋳型と考えられる。八町内で近接する左京第284次調査においても鉄滓が出土している。さらに、朝堂院西方官

付表１　長岡京鋳鉄鋳物遺物

調査次数	所在地	遺構名	鋳鉄鋳物	条坊位置
宮116次	向日市鶏冠井町山畑	SD1606(朝堂院西第四堂南面回廊排水溝)	雨壺１	朝堂院西方官衙
左京221次	向日市上植野町尻引	SD22101(東二坊大路東側溝)	車軸受１	左京三条三坊四町
右京236次	長岡京市井ノ内横ヶ端	溝(詳細不詳)	車軸受１	右京三条四坊一町
右京400次	長岡京市東神足２丁目	SD40009(七条条間北小路南側溝)	車軸受１	右京七条一坊十町



第５図　長岡京出土鋳鉄製雨壺･雨壺鋳型(1/4)
１.雨壺　２.雨壺雌型　３.雨壺雄型
(１.宮第116次調査　２･３.左京第14次調査)

衙地区でも、溶解炉や鍛冶炉(宮第326次調査)、大形羽口(宮第267次調査)などが出土している。(注10)

以上、長岡京における鋳造生産に関係する可能性のある遺構・遺物の概要を示した。概ね、(1)朝堂院西方官衙を中心とした地域と、(2)金属鋳造工房官司とされる左京二条二坊八町、(3)鋳造関連遺構を検出した右京六条三坊二町周辺の３地域において、鉄鋳造施設の存在を示唆する遺構・遺物が出土していることをみた。現状では鋳型の出土例が少なく判然とはしないが、少なくとも雨壺や車軸受(釭)(付表１)などの生産が考えられ、朝堂院など国家的重要建造物の荘厳化や、皇親女性・後宮女官の腰車(輦車)、高位貴族の牛車などの部品に供されたものと仮定しておきたい。

３．８世紀後半における鋳鉄鋳物生産の様相

８世紀後半から９世紀にかけての鉄鋳造に関わる遺構は、東北南部・関東・北陸および近江に見られる(付表２)。半地下式竪形炉など製錬遺構とともに検出されることが多く、古代においては、鉄製錬に付随して行われた鋳造生産の様相を知ることができる。東北南部・関東・北陸の３地域では、羽釜や鍋などの容器や獣脚の鋳型の出土が共通する。長岡京でみられた鋳鉄雨壺や車軸受などはみられず(注11)、鋳鉄鋳物生産による目的製品の相違は明確である。長岡京では羽釜や火舎を緑釉陶器で模倣、代用している点からすれば、獣脚の付く羽釜や鍋・火舎などは、在地的な生産と流通が考えられる(注12)。特に東北南部、福島県相馬地域製鉄遺跡群における１万点を超える夥しい鋳型片からは、それらの製品全てが在地寺院に収納される仏具として生産されたと推断することは難しい。後の出羽・陸奥の鉄価格(鉄１廷14束(「延喜主税式」禄物価法))からすれば、この官営と想定される製鉄所からの鋳鉄鋳物諸製品が一般集落への供給を前提に生産されたとも想定し難い。村上英之助氏は、東国に普遍的なシャフト炉(竪形炉)が北方アジア起源であることの傍証として、獣脚鋳型の存在を挙げておられ(注13)、獣面・獣脚意匠が北方アジアにおいて嗜好されていたとする。延暦６(787)年正月廿一日の太政官符(『類聚三代格』巻第19)からは、王臣家や国司が蝦夷との交易のために、密かに冑鉄を流用していたことが知られる。８世紀後半における渤海

付表2　8世紀後半～9世紀における鉄鋳造関連遺跡

遺跡名	所在地	鋳造関連遺構	鋳型(他)	時期
向田A	福島県相馬郡新池町	1～9号鋳造遺構	羽釜.鍋.獣脚.梵鐘.他	8世紀後半～
向田D	福島県相馬郡新池町	13号炭窯作業場	獣脚.他	8世紀前半
猪倉B	福島県相馬市大坪	1・2号鋳造遺構	鍋.獣脚.他	9世紀後半
山田A	福島県相馬市大坪	1～6号鋳造遺構	鍋.獣脚.梵鐘.風鐸.香炉.他	8世紀末～
花前	千葉県柏市船戸	49号製鉄炉上部	鍋.獣脚.蓋.他	9世紀
台耕地	埼玉県大里郡花園町		獣脚.(獣脚製品.印章鋳型)	9世紀後半～
大山	埼玉県北足立郡伊奈町		獣脚	9世紀
押沼第1遺跡D	千葉県市原市押沼		容器.獣脚.他	9世紀後半
深田	神奈川県横浜市栄区		獣脚	9世紀
三熊内山窯跡	富山市三熊字内山	溶解炉	鍋.獣脚	9世紀
綿打池A	富山市小杉町赤坂	溶解炉	羽釜.鍋.獣脚.(鍋製品)	9世紀
恩坊池A	富山市小杉町赤坂	溶解炉	容器.獣脚.他	9世紀
上野南ⅡB	富山市小杉町水蔵場	溶解炉	鍋.獣脚.梵鐘.(鍋製品)	9世紀中葉～
矢倉口	滋賀県草津市矢倉		容器.(取鍋？)	8世紀中葉

使や鉄利等の来朝記事から推される交易を主眼とした交流をも考慮すれば、獣脚の付く羽釜や鍋などは、王臣家や国司によって、蝦夷あるいは渤海・靺鞨との私的交易に流用されたと想像する余地はなかろうか。

4．おわりに

これまでの金属学的分析によって、青森県根岸遺跡や群馬県荒砥上ノ坊遺跡・静岡県中野遺跡[注14]などでは、銑鉄素材を脱炭した鋼材が認められており、奈良時代から平安時代初頭の鉄器製作が広範な銑鉄の流通に依拠していた可能性が指摘されている[注15]。おそらく、関東地方を中心とした半地下式竪形炉の操業によって高炭素鋼や銑の生産比率が相対的に増加したことによるものであろう。このような8世紀後半における銑鉄素材の広域流通の実現が、鉄製錬遺跡以外においても鋳鉄鋳物生産が可能となる前提であった。長岡京でもそれら銑鉄素材の供給によって、鋳鉄鋳物生産が容易になったものとみることができる。ただし、その供給は、おそらく官営工房に独占され、宮城の造営など、国家の中枢事業に供されるものであったとみたい。

古代の鋳造に関して御教導いただいた潮見　浩先生、炉壁の観察視点を御教示いただいた穴澤義功氏に感謝いたします。想像を交えた小文を作成するにあたって、魚津知克・大道和人・小田桐　淳・神崎　勝・木村泰彦・古内　茂・松村知也・山中　章(敬称略)の各氏には、資料観察における御教示や、参考資料収集・遺物実見の便宜を図って頂いた。芳名を記して感謝いたします。また、表中の引用文献については、紙幅の都合上、割愛した。ご了承願いたい。

(のじま・ひさし＝当センター調査第2課調査第4係調査員)

参考文献　福田豊彦「日本古代鉄生産の諸様相―中世製鉄の前提として―」(『日本史研究』280号日本史研究会)　1985

注１　山中　章「長岡京の金属(器)生産」(『考古論集　潮見　浩先生退官記念論文集』　潮見　浩先生退官記念事業会)　1993

注２　石尾政信「４．長岡京跡右京第440次発掘調査概要(7ANKNZ-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第58冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1994、野島　永「７．長岡京跡右京第474次発掘調査概要(7ANKNZ-７地区)」(『京都府遺跡調査概報』第66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995

注３　長岡京の条坊路・町呼称については、山中　章氏の論考に従う(山中　章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第４号)　1992)。

注４　小田桐　淳「右京第109次(7ANKNZ地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報　昭和57年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1983

注５　小田桐　淳「第２章　長岡京跡右京第447次(7ANKNZ-6地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊　長岡京市教育委員会)　1994

注６　福島県相馬開発関連遺跡群山田Ａ遺跡６号鋳造遺構においても、溶解炉基礎構造の掘形と鋳込み作業場が複数重複して検出された。長岡京右京六条三坊七町例では、雨壷など比較的小さな器物の鋳造を主眼としていたためか、作業場自体が小さくなると思われる。(吉田秀享・田代和明・佐々木慎一・渡辺悦子・酒井　優・小暮伸之編『相馬開発関連遺跡調査報告』Ⅴ　福島県文化財調査報告書第333集　福島県教育委員会・(財)福島県文化センター　1997)

注７　内田俊秀「付論　ＳＸ44729－Ｂ出土炉壁付着物の検討」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊長岡京市教育委員会)　1994

注８　山中　章「２．長岡宮跡第128次(7AN10K地区)～内裏南方官衙(推定春宮坊跡)～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集　向日市教育委員会)　1984

注９　山中、注１前掲論文

注10　中塚　良「６．長岡京跡左京第284次(7ANEJS-10地区)～左京二条二坊八町(南一条二坊六町)・東二坊坊間小路、石田遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第37集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会)　1993、山中　章「長岡京遷都時の「地鎮祭跡」～長岡宮跡第326次(7ANEYT-2地区)～」長岡京連絡協議会No.96-05　1996、山中　章・秋山浩三「３．長岡宮跡第267次(7AN15U地区～朝堂院西方官衙、乙訓郡衙～発掘調査概要)」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第36集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会)　1993

注11　神奈川県海老名本郷遺跡で車軸受類例がみられるが、現状では生産地を限定できない(合田芳正編『海老名本郷』Ⅷ　富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団　1991、会田芳正「いわゆる車軸頭形鉄器について」(『青山考古』第７号　青山考古学会)　1989)。

注12　五十川伸矢氏は、獣脚の付く鍋・釜を仏具ではなく一般煮炊容器とし、その生産と普及が限定的なものであったことを指摘されている(五十川伸矢「四．鍋釜の生産と供給」(鋳物の科学技術史研究部会編『鋳物の技術史』(社)日本鋳造工学会)　1996)。なお、本稿では、鋳造鉄製品を五十川氏の言う「鋳鉄鋳物」とした。

注13　村上英之助「古代東国に出現するシャフト炉の系譜」(『たたら研究』第31号　たたら研究会)　1990

注14　赤沼英男「根岸(２)遺跡出土小札および鉄滓の金属学的解析」(『根岸(２)遺跡発掘調査報告書』青森県百石町教育委員会)1995、赤沼英男「荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の金属学的解析」(『荒砥上ノ坊遺跡』Ⅱ　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第203集　群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)　1996、佐々木　稔「浜松市天王中野遺跡出土の鉄塊と奈良時代の鋼精錬法」(『浜松市博物館館報』Ⅶ　浜松市立博物館)　1995

注15　赤沼(1996)、注14前掲文献

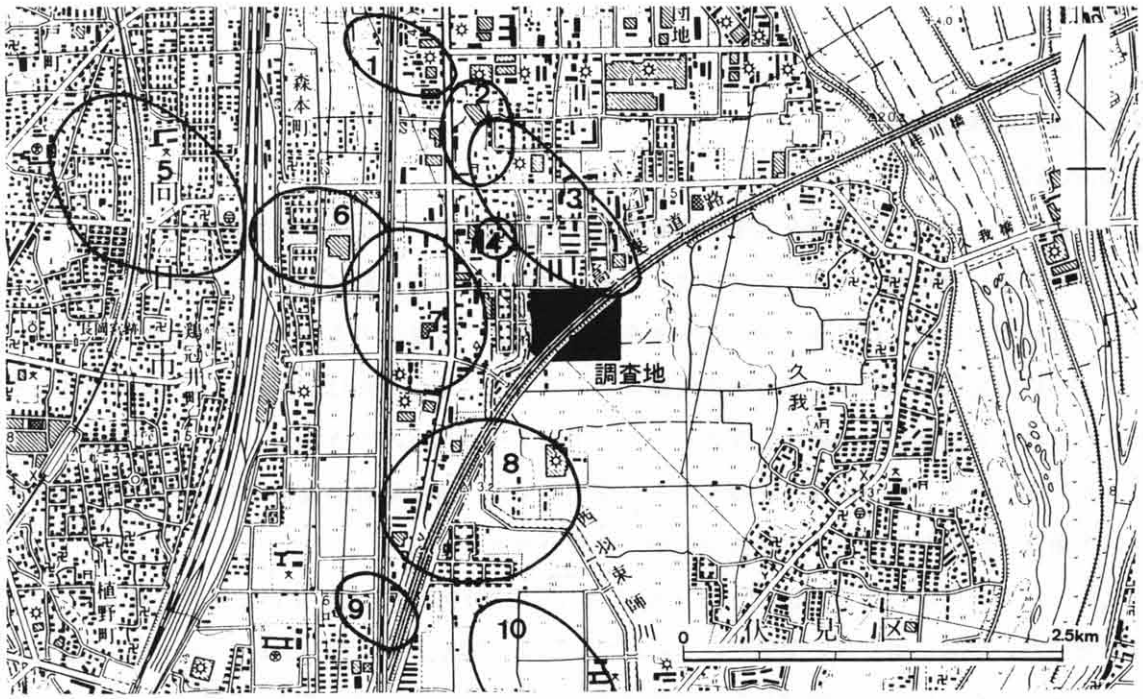
弥生時代の東土川遺跡

中川　和哉

1．はじめに

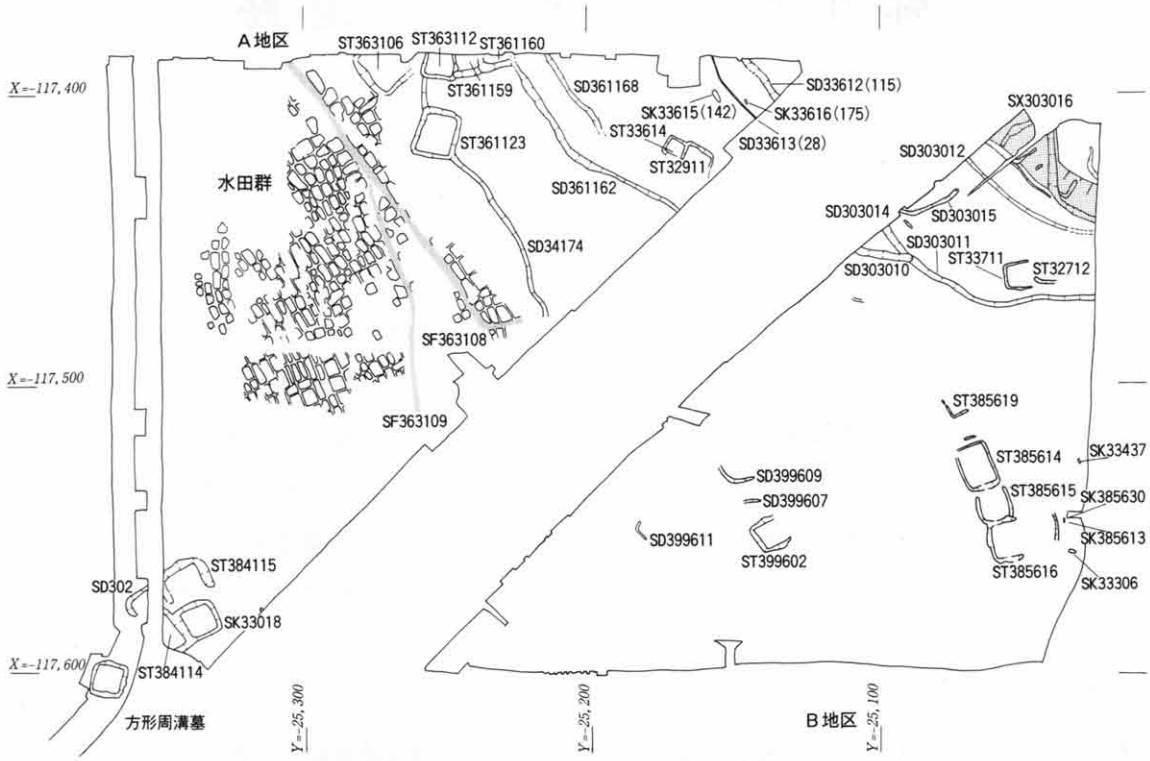
東土川遺跡は、京都盆地の西側、桂川の西岸に広がる縄文時代から中世に至る複合遺跡である。遺跡の調査は、河川改修や民間開発に先立つ発掘調査が、断片的に実施されてきた。今回紹介する調査地は、名神高速道路本線拡張区と桂川南パーキングエリア建設に伴い発掘調査したものである。発掘調査は平成５年から同９年までの５か年度にわたって実施された。発掘調査の概要は、当センターの年度ごとの概報によってすでに発表済である。しかし、隣接するトレンチ間の遺構の配置や遺物、図面整理作業の結果、現在までわかったことを加味して、ここで弥生時代の東土川遺跡の性格について論じてみたい。

調査地である桂川南パーキングエリア予定地は、全体では東西に長い長方形を呈し、調査対象面積は約50,000㎡であった。北東から南西に斜めに横切る名神高速道路本線部分によって南西部と北東部に分かれ、それぞれが上り車線と下り車線のパーキングエリアとなる。調査区はまず北東側をＡ地区、南西側をＢ地区として実施し、個別のトレンチはそれぞれの地区内の割り付けによって数字を付け、必要な場合はさらにアルファベットの小文字によって枝番号を付けた。また、



第１図　調査地位置図および周辺遺跡分布図

1．鶏冠井遺跡　2．東土川西遺跡　3．東土川遺跡　4．東土川城遺跡　5．森本遺跡　6．石田遺跡
7．鶏冠井遺跡　8．鶏冠井清水遺跡　9．芝ヶ本遺跡　10．羽束師遺跡



第２図　東土川遺跡（ＰＡ工区）検出弥生時代遺構平面図

概報で方形周溝墓の溝をＳＤ・ＳＸと表記したものについては、ＳＴに訂正した。同一の遺構であるにもかかわらず、トレンチが異なり、報告番号の異なるものは、調査年次の古い遺構番号を採用した。

２．検出遺構と遺物

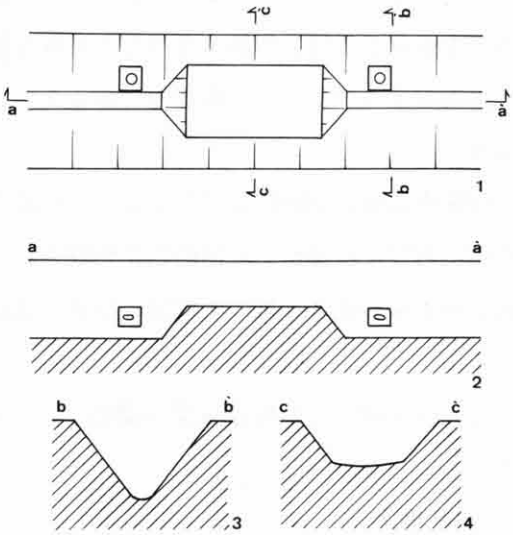
(a) Ａ地区

この地区からは、方形周溝墓10基・道路状遺構・環濠・溝・土坑・水田を検出している。

方形周溝墓は南角部に３基、北辺中央に５基、東部に２基の３群に分かれて分布する。南角部のものは京都市埋蔵文化財研究所の調査地を加味すると、５基の方形周溝墓群から成り立っている。この周溝墓群の北側は古墳時代の流路にあたり、北に延びるかは不明である。溝の深さはそれぞれの墓で最深部が70cm前後と深かったが、中央主体部は検出できなかった。ＳＴ384114の北辺・東辺溝の底部で10cmの深さを持つ窪みを検出したが、溝中埋葬か確定できなかった。周溝内の出土遺物（第４図10）から弥生時代中期前～中葉と考えられる。

北辺中央の一群は、ＳＴ363112・ＳＴ361159・ＳＴ361160の３基が互いに溝を共有している。検出面において溝に切り合い関係が認められた。断面の観察から下部においては一連に連なっていた状況が認められるが、埋没した後に部分的に掘り直されたものと考えられる。ＳＴ363112とＳＴ361123を繋ぐ溝が検出できたが、対になる東側の溝は土層を断ち割って検出に努めたが、検出できなかった。溝と溝を繋ぐ目的で作られたものと考えられる。ＳＴ361123は長辺約17m・短

辺約15mの比較的大型の方形周溝墓である。溝の東辺と南辺には溝中埋葬が見られた。他の辺も土器の集中や窪み痕跡が見られたが、攪乱等のため性格の確定ができなかった。出土土器(第4図5～8)から弥生時代中期前葉と考えられる。他の方形周溝墓と方向を異にするＳＴ363106は、正方位に対して45°程度振っている。削平や攪乱によって寸断されているが、直角に曲がる特徴から方形周溝墓とした。時期は出土遺物(第4図1・2)から弥生時代中期後葉に位置づけられる。東部の2基は、南辺の溝を自然流路により損失している。遺物量は微量であったがＳＴ33614周溝出土の土器(第4図9)から弥生時代中期中葉と考えられる。



第3図　ＳＤ361162入り口状遺構模式図
1.平面図　2～4.断面図

溝は概ね、調査区の北東方向から南東方向に貫き、自然流路の方向と一致するが、断面には流水による堆積は認められなかった。

ＳＤ33612は、藁灰を含む粘土質の埋土に多量の土器と石器が含まれていた。土器群には、弥生時代中期前葉に所属するものが若干量混在するが、層位的に中期後葉の土器が出土し、上層ほど新しい様相を持つ。名神高速道路本線を挟み、Ｂ地区のＳＤ303011に続くと想定される。

ＳＤ361168・ＳＤ361162は、並行する断面が「Ｖ」字状を呈する溝である。断面の形状から環濠の一部と見られるが、遺物は少ない。ＳＤ361168は上面を古墳時代の流路によって削られており、南東部は残存していなかった。ＳＤ361162もまた同流路に削られ南東部の残りが悪かった。この溝は北端でＳＴ361160のコーナー部分で連結するが、現代の建物基礎による攪乱で、切り合い関係や北への延び方は不明であるが、古墳で言う墳丘部分には続かなかったことから、周溝の南東隅に取り付くとも考えられる。埋土上層は埋め戻されたと考えられる層で、この層から弥生時代中期後葉の水差し形土器が出土している。ＳＤ361162は、硬く締まった礫層を開削して作られているが、1か所のみ浅く礫層が掘り残されている部分(第3図)が認められた。この掘り残し部分の両脇には模式図で書いたように1対の方形の柱掘形が認められた。環濠の入り口部分の下部構造と考えられる。ＳＤ361168では、対応する箇所が流失していた。

ＳＤ34174は、ＳＴ361123の周溝南東隅からはじまり南に消える断面が逆台形状を呈する溝である。検出面において新旧関係は判別できなかった。方形周溝墓と同時かそれ以後の周溝を意識して掘削されたものと考えられる。ＳＴ361112とＳＴ361123を繋ぐ溝の存在と加味して考えていく必要がある。

水田状の遺構はＡ地区でのみで検出し、270枚以上存在する。北で30°程度振る長辺の畦はほぼ並行するが、それと直交する短辺の畦は不揃いである。水田1枚あたりの大きさは小さく、10m²を下回るものが大半である。水口跡と考えられるものも存在する。花粉分析の結果、水田面で多

量に発見されるはずであるプラントオパールの含有量は、皆無か数個といった程度であった。上層の水田面が下層に影響を及ぼした痕跡を掘削していたものと想定できる。水田の帰属時期は出土遺物がまったくないため不明であるが、ＳＴ363106と軸がほぼ揃うことか中期後葉の年代観を与えたい。

道路状遺構(大畦畔)は「Ｙ」字状に分岐するＳＦ363108・ＳＦ363109の２本が検出されている。水田と密接な関係があり同時期に形成されたものと考えられる。概報では盛り土と考えているが、水田の本来の面より低く土壌化の結果、水田形成以後に引き起こされた下層の土色変化と考えられる。

Ａ地区の南部には中期後葉の遺物は少ないが、ＳＫ33018からは中期後葉の土器がまとまって出土している。

(b) Ｂ地区

方形周溝墓・溝・土坑・土壙・湿地状遺構を検出している。方形周溝墓は10～12基程度存在する。削平が著しいため方形周溝墓の正確な数は特定できない。南東側の一群・南西側の一群・北部の一群の３群に分かれる。

南東側の一群は出土遺物から弥生時代中期中葉～後葉に位置づけられる。特にＳＴ38519の溝中埋葬主体部(中川1998b)からは大量の磨製石剣の鋒、打製石鏃が出土した。石器の破損状態などから体内に射込まれたり、刺されたものと考えられる。

南西側の一群ＳＴ399602の溝から弥生時代後期～庄内にかけての土器が出土しており、この時期の遺構は調査区内ではこれ以外には認められないが、遺物は古墳時代の流路などに若干量含まれる。

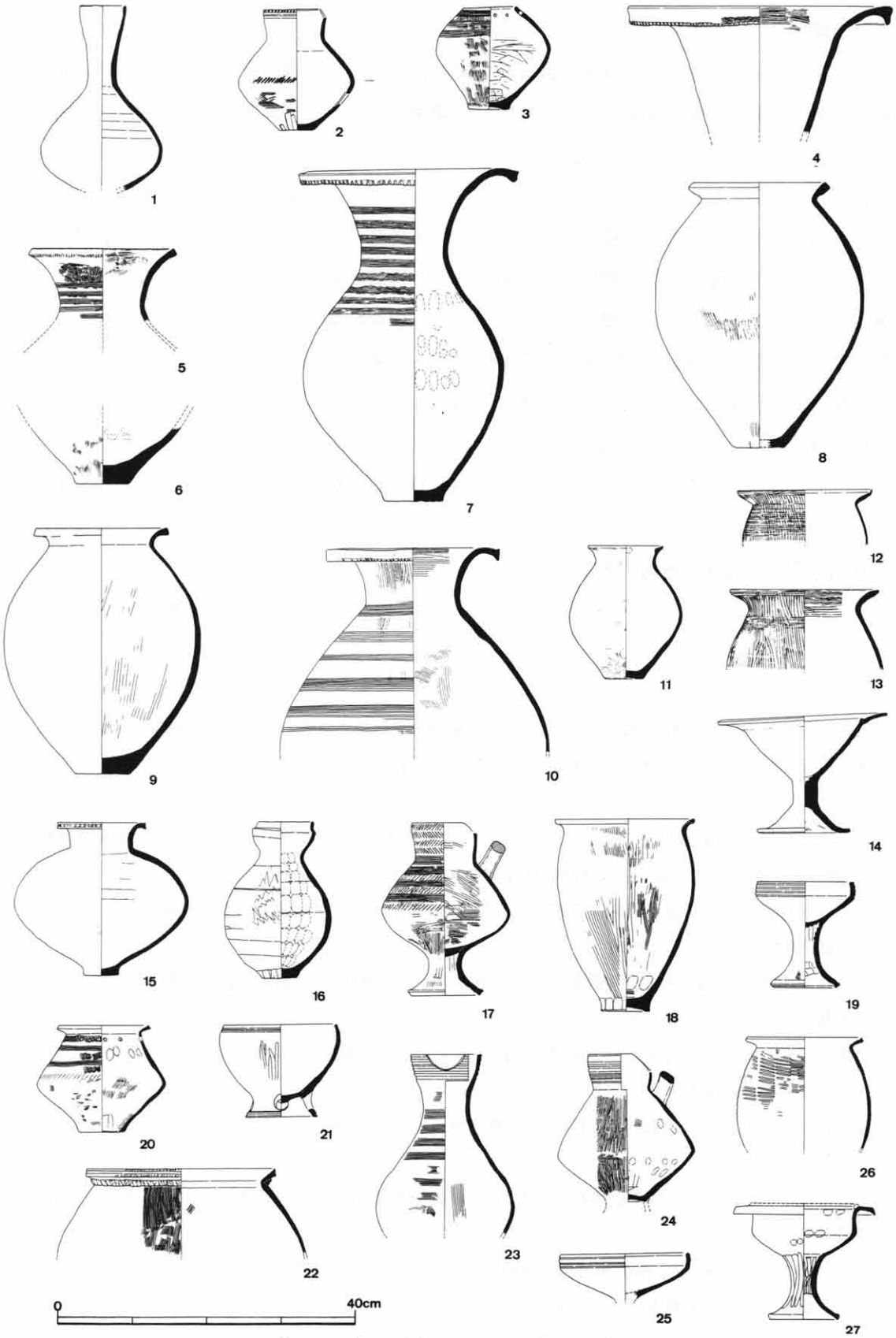
北部の一群は残存状況が悪く、時期を特定できない。

溝は大きなものは５本を検出している。ＳＤ303011は、Ａ地区のＳＤ33612とつながると考えられる溝である。ＳＤ303010は、ＳＤ303011・ＳＤ361168・ＳＤ361162の何れかに対応するが、ＳＤ361168に連続する可能性が高い。ＳＤ361162は、Ｂ地区の自然流路がＳＤ303011に並行してあることと、流路の底部に部分的に中期後葉の土器が出土していることから、大部分が流路によって削られているものと考えられる。この流路からは、完形の打製石剣が、１点出土している。ＳＤ303012は断面が逆台形を呈する溝で遺物は少ないが、弥生時代中期に属すと考えられる。

ＳＫ385630・ＳＫ385613(中川1998a)はサヌカイト製の剥片を多く含む土坑である。石器製作時に生じた剥片・砕片・破損品を捨てたと考えられる。

ＳＫ33437は長方形を呈する土壙で、両短辺に木口板を固定した落ち込みが認められた。時期の特定はできない。

湿地状遺構ＳＸ303016は、黒灰色の粘質土を基調とするとする埋土中から、多くの木製品が出土した。出土遺物には、又鍬・鋤・鍬・柄・タモ・蓋・高杯・楽器・椀等がある。同時に材料と考えれられる表皮付きの木材が出土している。土器には、弥生時代の中期全般のものが含まれる。しかし、中葉から後葉のものが主体を占める。



第４図　東土川遺跡（ＰＡ工区）出土遺物

1・2．ＳＴ363106　3・4．ＳＴ361159　5～8．ＳＴ361123　9．ＳＴ33614　10．ＳＴ336114
11．ＳＴ385615　12．ＳＴ385619　13・14．ＳＴ385616　15．ＳＴ399602　16・17．ＳＫ333018
18・19．ＳＸ303016　20～27．ＳＤ32612

3．小結

当時の集落構造を考えると、今回の調査地内では、墓域と生産域を調査していたものと考えられる。全体に方形周溝墓の供献土器と考えられる遺物を除くと出土量は少なく、環濠内の遺物も疎らであったことから、生活域は北側にあるものと想定できる。それを傍証するように、もっとも北に位置するＳＤ33612からは、多量の土器が出土している。環濠は生産域と集落を画しており、入り口は生産域に向かって開かれている。古い周溝墓と環濠が連結することの意義は不明である。しかし、周溝墓の一部を利用または取り込んだ環壕であることは否定できない。

東土川遺跡の、弥生時代の遺構で最も古いものは、中期前葉でも後半に属すものである。この時期は近接する鶏冠井遺跡(國下1998)の存続時期と一部重なるが、鶏冠井遺跡が前期から中期前葉を主体とする遺跡であるのに対して、東土川遺跡の時期はずれている。このことは東土川遺跡の出現契機と密接な関係があるものと考えられる。

ただ、周辺地域の調査例(北田1988・鍋田1995)を見ると海抜13～15mの地域で方形周溝墓が見付かっており、墓域は断続的に広がっているものと考えられる。このことからも東土川遺跡は未知の拠点集落の可能性が指摘できる。

(なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第２係調査員)

北田栄造1988「長岡京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報』京都市文化観光局

國下多美樹ほか1997『向日市埋蔵文化財調査報告書』第45集　(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会

戸原和人ほか1995「長岡京跡左京第303・314・315次調査(名神高速道路関係遺跡平成５年度発掘調査概要)」『京都府遺跡調査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

戸原和人ほか1996「名神高速道路関係遺跡平成６年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第69冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

戸原和人ほか1996「名神高速道路関係遺跡平成７年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第74冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

岩松　保・野島　永1997「名神高速道路関係遺跡平成８年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第78冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中川和哉1998a「弥生時代石器研究の実践」『京都府埋蔵文化財情報』第67冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中川和哉1998b「桂川右岸における石剣の出土例」『京都府埋蔵文化財情報』第68号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

鍋田　勇1995「Ｅ－２地区(名神高速道路関係遺跡平成５年度発掘調査概要)」『京都府遺跡調査概報』第61冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成10年度発掘調査略報

1．橋爪遺跡第5次

所 在 地　熊野郡久美浜町橋爪65番地

調査期間　平成10年5月12日～7月3日

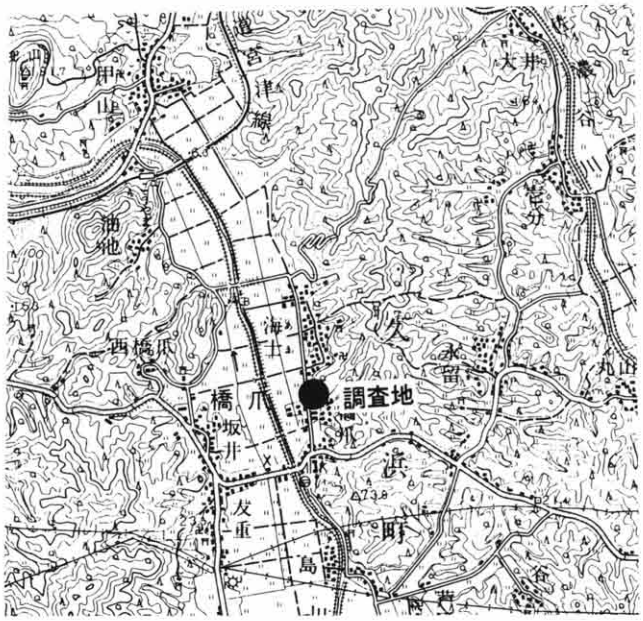
調査面積　約420㎡

はじめに　今回の調査は、府立久美浜高等学校の福祉実習棟の新築工事に先立ち、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。

橋爪遺跡は、川上谷川流域に存在する弥生時代の丹後地域の代表的な遺跡である。西側は、河川によって形成された沖積地が広がり、東側は茶臼ヶ岳古墳群などが存在する丘陵がある。当遺跡は、丘陵裾の段丘上に存在している(第1図)。この遺跡は、大正12年に遺物が採集されて以来、昭和42年の第1次調査からこれまで過去4度の調査が行われた。今回の調査地は、過去の調査地よりも北側に位置し、第2次調査区(昭和55年)の隣接地にあたる。

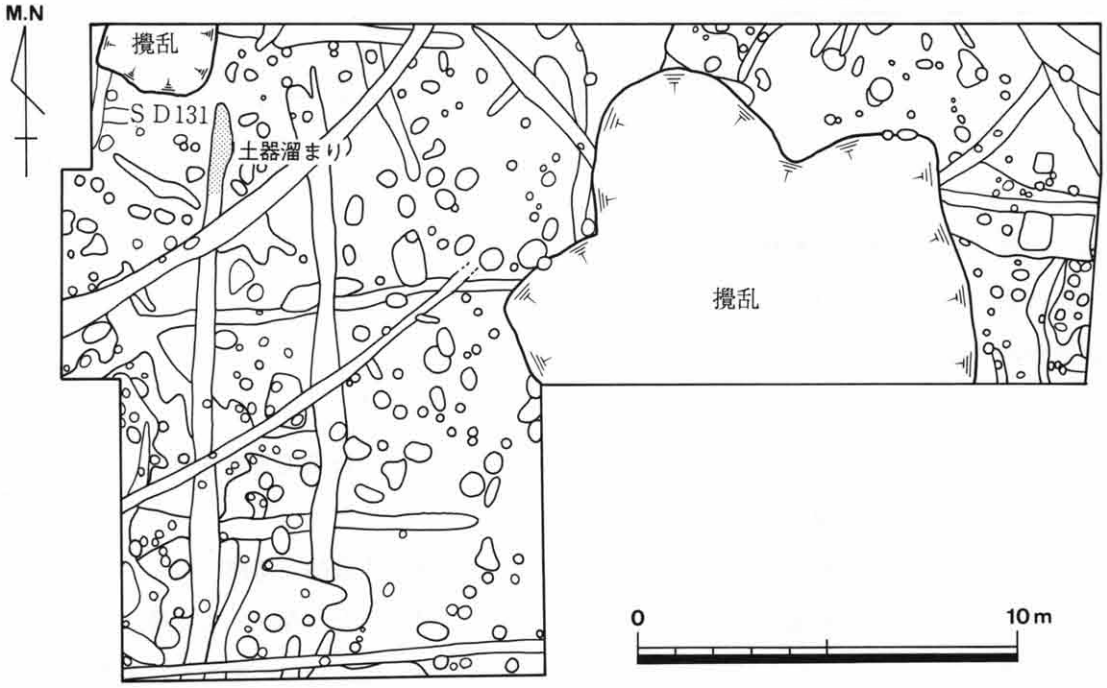
今回の調査では、住居跡などの遺構の検出とともに、遺跡の北側の範囲が確認できるであろうと期待した。これまでの発掘調査によって、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての遺構が確認されている。また、この遺跡から出土した土器は、丹後地域の弥生時代の土器編年の良好な資料となっている。

調査概要　調査区は、建設予定範囲内にトレンチを設定した。現地表面から約1.2m掘り下げたところで黒色粘質土の遺物包含層を確認した。この遺物包含層は、東側で約20cm、西側では約10cmの厚さの堆積があった。この層には、弥生時代、および奈良時代後期～平安時代の遺物が少量含まれていた。丘陵側にその時期の遺構の存在が予想される。また、時期は不明であるが、トレンチの東側部分の包含層上面で方形の土坑や円形のピットを数基検出している。



第1図　調査地位置図(1/50,000)

遺物包含層の下層で、弥生時代の遺物を含んだ遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物跡を構成するであろうピット群や、土坑・溝などであった。ピットは、ト



第２図　調査トレンチ遺構平面図

レンチ内全域で検出した。溝は、南北溝と東西溝がほぼ同間隔で交差している状況を検出した。トレンチの西側部分には、南北溝（ＳＤ131）があり、そこから多量の弥生時代中期の遺物が集中して出土した。遺物は、溝がとぎれた部分に堆積していた。遺物には、把手付きの大型壺の口縁部から頸部にかけての部分や、高杯・甕などがあった。そのほかの溝や土坑・ピットなどからも弥生時代の土器や石器・砥石・土錘などが出土した。

まとめ　今回の調査では、約10～20cmの遺物包含層と、多くのピット群や土坑・溝などの遺構を検出し、整理箱で40箱にもおよぶ遺物が出土した。検出した多くのピットは、現在、掘立柱建物跡の復原について検討中である。しかしながら、この地区に何棟かの建物が建てられていたと考えられる。南北溝と東西溝については、規則的に掘られているように見え、何らかの区画がなされていた可能性が考えられる。

また、今回の調査区内には、集落の区切りになるような遺構もなく、第２次調査同様に遺構が確認できたので、遺跡の範囲はさらに北に広がっていることが確認できた。

今回の調査では、多量の遺物が出土した。この遺跡の出土遺物は、丹後地域の弥生土器の良好な編年資料になっており、今回の出土遺物もそれらを補う良い資料となるであろう。

（村田和弘）

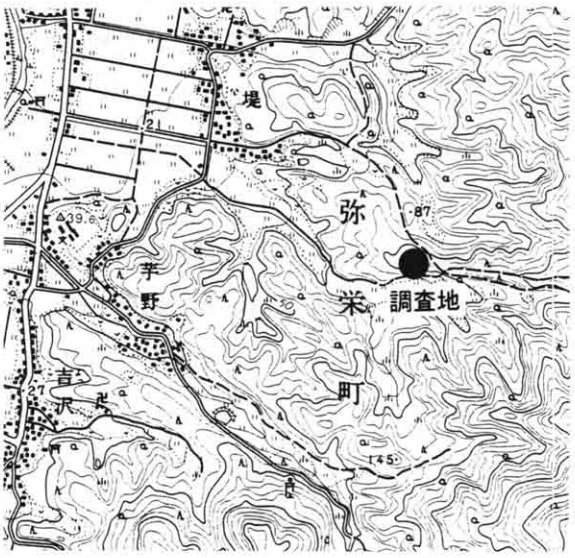
2．シミズ谷古墳群

所 在 地　京都府竹野郡弥栄町字堤小字シミズ谷

調査期間　平成10年4月20日～5月22日

調査面積　約90m²

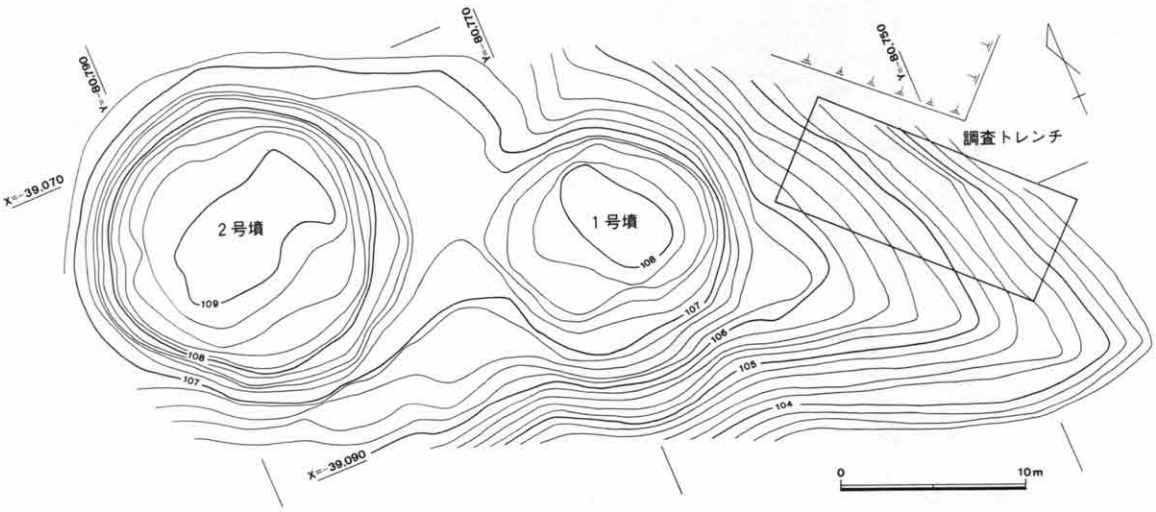
はじめに　この調査は、国営農地丹後東部地区開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。シミズ谷古墳群は、竹野川の東岸の標高106mの丘陵上に位置し、高所に造営された数少ない古墳群の一つである。また、北西側の丘陵上には、堤城跡・シミズ谷城跡があり、さらに愛宕神社古墳群が存在する。



第1図　調査地位置図(1/50,000)

調査概要　調査地は、1号墳東側の低い古墳状隆起が認められる部分の北側斜面が対象となった。腐植土・黄褐色土を除去したが、1号墳の裾部は認められず、古墳状隆起についても、盛土・溝などは検出できず、古墳と断定するには至らなかった。なお、黄褐色土からは、古墳時代中期と判断される土器片が出土し、この古墳群の築造時期を推定する資料になるものと考えられる。

（竹井治雄）



第2図　調査トレンチ配置図

3．桑原口遺跡第４次

所 在 地　宮津市字喜多小字桑原口

調査期間　平成10年5月11日～７月２日

調査面積　約300㎡

はじめに　この調査は、京都縦貫自動車道建設事業に伴い京都府道路公社の依頼を受けて実施した。桑原口遺跡は、大手川により形成された、宮津谷と呼ばれる沖積地の段丘上から、丘陵斜面にかけて立地し、宮津谷中央部の大手川右岸に所在する。過去３次にわたる調査が実施され、竪穴式住居跡や溝などの遺構とともに、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器やガラス製勾玉・銅鏃などが出土している。

調査概要　平成10年度の調査は、平成７年度に調査を実施した第２次調査地の南側隣接地が対象となった。調査地南端では、開墾に伴い削平された丘陵裾部分を確認すると共に、中央部分より北側では地表下１～1.2mで弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物包含層(黒色粘質土)を確認した。遺構は、包含層下の暗青灰色砂土層より検出した。検出した遺構は、第２次調査で検出されている円形竪穴式住居跡(ＳＨ07)の南側半分と円形竪穴式住居跡の一部と考えられるもの２基・掘立柱建物跡２基・溝(ＳＸ02)・土坑２基・柱穴約150・板杭列である。これらの遺構の大半は、弥生時代後期末で、ＳＸ02については古墳時代中期後半である。

まとめ　調査地周辺を踏査したところ、東側丘陵斜面や南側谷部北斜面側でも遺物が散布しており、遺跡の広がりが大きくなることが明らかとなった。時期的にも弥生時代後期を中心に平安時代まで認められる。また、南側谷部北斜面の散布地については、今後、試掘調査を行う予定であり、その結果によって、遺跡の範囲が確定できるものと考えられる。

今回の調査は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴式住居跡や溝を検出し、多くの遺物が出土した。これらの資料は、過去３次にわたる調査成果と合わせ、この地域における集落の変遷、土器編年を考察する上で重要な資料となった。

(増田孝彦)

調査地位置図(1/50,000)

4．今福古墳群

所 在 地　宮津市字今福小字梶谷

調査期間　平成10年5月11日～7月30日

調査面積　約430㎡

はじめに　この調査は、京都縦貫自動車道建設事業に伴い、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。今福古墳群は、大手川右岸の標高80mの丘陵上に位置する。今福古墳群は、当初９基からなる古墳群であったが、工事に先立ち京都府教育委員会及び宮津市教育委員会の分布調査により新たに４基確認され、総数13基からなる古墳群である。調査の対象となったのは、新たに確認された10号墳～13号墳である。

調査概要　試掘の結果、10・12・13号墳からは、遺構・遺物が検出されず、古墳とは確定できなかった。ただし、平成８年度に墳丘裾付近の試掘調査が行われた際には、須恵器片が出土しており、古墳であった可能性も残る。一方、11号墳では、墳頂部の開墾に伴う褐色土中より須恵器片が出土した。しかし、埋葬施設は完全に削平されたようで残存しない。墳丘裾部についても開墾のために確認することはできなかった。

また、10号墳とされた平坦部から鍛冶滓が少量出土し、11号墳では、開墾に伴う褐色土より鍛冶滓や鉄器(釘・刀子・針・飾り金具・口金)が出土した。鉄器が出土した周辺の土砂を水洗し、内容物の磁着採集を行った結果、少量ではあるが鍛造剥片・粒状滓が採集された。鍛冶炉等の遺構は検出されなかったが、遺物から、墳頂部で鍛冶生産が行われていたと考えられる。これらの遺物とともに、16～19世紀にかけての陶器・磁器が出土しているが、鍛冶生産が行われていた時期を明確にすることはできなかった。

まとめ　今福古墳群は、古墳群が位置する丘陵全体が開墾を受けており、古墳の痕跡を確認することはできなかったが、10・11号墳は立地・出土遺物から古墳であった可能性が高いと考えられる。鍛冶生産遺物は、丹後半島内で調査されたものの中ではもっとも新しいものとなり、鉄器生産の移り変わりを考えていく上で重要な資料となった。

(増田孝彦)

調査地位置図(1/50,000)

5．川向古墳群第2次

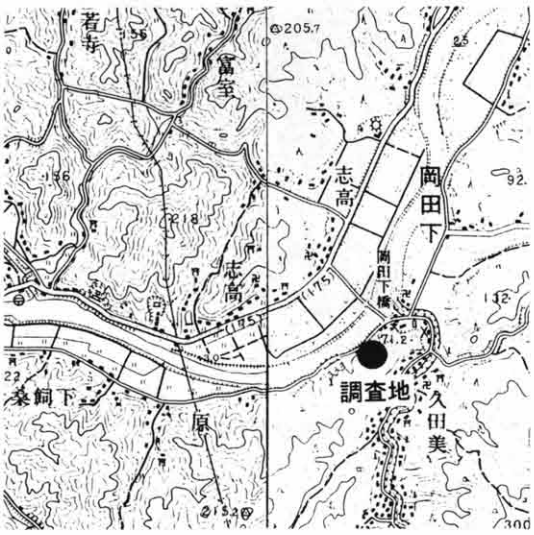
所 在 地　舞鶴市志高小字川向

調査期間　平成10年4月28日～7月24日

調査面積　約700㎡

はじめに　今回の調査は、府道舞鶴福知山線の拡幅工事に伴い、京都府土木建築部の依頼によって実施した。川向古墳群は志高遺跡の由良川を挟んだ対岸の丘陵上に位置し、志高遺跡の墓域と考えられる古墳群である。なお1次調査では4号墳を調査し、古墳時代前期初頭の木棺直葬の主体部1基と土器棺墓1基を検出している。2次調査では2号墳と3号墳を調査した。

調査概要　2号墳は長辺約9m・短辺約7mの平面形が長方形を呈する方墳で、高さは約1mを測る。3号墳も長辺約15.5m・短辺約8mの平面形が長方形を呈する方墳で、高さは約1mを測る。2号墳の主体部は組合式箱形木棺を直葬している。墓壙は、長さ4.8m・幅2.3mであり、一段墓壙の中央を約5cm掘りくぼめて木棺を据え、木棺の両脇に木棺を支えるための裏込め土を入れている。木棺の規模は長さ4.4m・幅0.6mを測る。木棺をある程度埋め戻してから拳大の礫を木棺に沿って配置している。3号墳の主体部は組合式箱形木棺を直接納めるものを2基確認した。第1主体部は墳丘上部平坦面のほぼ中央に二段墓壙を掘り、木棺を納める。墓壙の規模は長さ5.1m以上・幅2.1m・深さ約0.8mを測る。木棺の規模は長さ約3.9m・幅約0.8m。木棺と墓壙との隙間には3～5cm大の礫が詰め込まれていた。棺内からは鉄刀1点・袋状鉄斧1点が出土した。第1主体部の墓壙上では、供献土器群を検出した。土器はいずれもほぼ完形に復原できる。第2主体部は第1主体部に直交して配置され、第1主体部を切って作られる。規模は長さ3.9m・幅2.1mを測る。二段墓壙に木棺を納め、裏込めの土とともに拳大の礫を墓壙と木棺の隙間に入れる。木棺の規模は長さ3.9m・幅0.6mを測る。木棺内には、棺上から転落したと思われる小型鉄斧が1点出土した。木棺をある程度埋め戻した後に、10～40cm大の礫を木棺に沿って配置していた。



調査地位置図(1/50,000)

まとめ　今回の調査では、よくわかっていなかった古墳時代前期の由良川下流域の埋葬法を知る上で、重要な資料を得ることができた。この地域の古墳時代前期の首長は、弥生時代の伝統を色濃く残した在地の首長であったと考えられる。

(福島孝行)

6．成勝寺跡・岡崎遺跡

所 在 地　京都市左京区岡崎成勝寺町９番地

調査期間　平成10年４月22日～６月10日

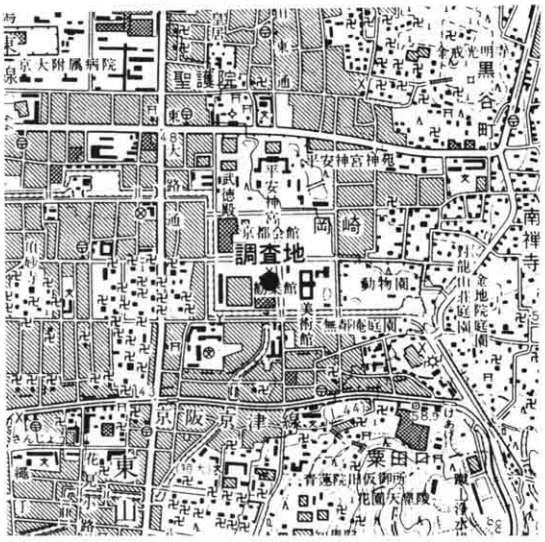
調査面積　約430m²

はじめに　成勝寺跡・岡崎遺跡の発掘調査は、京都府立図書館の新築工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが昨年度から実施している。調査対象地は、旧図書館建物の東側と南側にあたり、調査予定地の北半部を昨年度(平成９年12月～同10年３月、調査面積約280m²)に調査し、今年度に南半部の調査を行った。

この地域では、平安時代終わりの院政期(11世紀後半～12世紀)に白河天皇の建てた法勝寺(1077年落慶)を始め、尊勝寺(堀河天皇・1102年)・最勝寺(鳥羽天皇・1118年)・円勝寺(待賢門院・1128年)・成勝寺(崇徳天皇・1139年)・延勝寺(近衛天皇・1149年)の、いわゆる六勝寺と呼ばれる御願寺が造営された。調査地付近には成勝寺町の地名が残ることなどから、成勝寺推定地として調査を実施した。

昨年度の調査では、竪穴式住居跡を主とした古墳時代後期の集落跡や院政期から鎌倉時代の六勝寺に関連するとも考えられる掘立柱建物跡と井戸などが見つかっている。

調査の概要　今年度の調査では、弥生時代後期(壺・高杯・器台など)・古墳時代後期(土師器甕・壺・高杯・甑、須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯・甕など)・平安時代後期(瓦質盤、土師皿、白磁・青磁碗、軒丸・軒平・丸・平瓦など)の遺物を含む沼状の窪地をトレンチ南側で確認し、さらに下層からは複数の火山灰層が見つかった。沼状窪地の上層では、鎌倉時代以後の耕作に伴う東西・南北方向の溝などを確認した。また、トレンチ北半部分では、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡・木組み井戸・土坑・ピットを検出した。



調査地位置図(1/25,000)

まとめ　昨年度の調査成果と合わせて考えると、岡崎遺跡の関係では、竪穴式住居跡を主とした古墳時代後期の集落跡と当時の生活域を確認した。また、六勝寺に関連する施設であった可能性のある、院政期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡と井戸を確認したが、成勝寺に直接つながる遺構は未検出に終わった。

(有井広幸)

7．畑ノ前遺跡

所 在 地　京都府相楽郡精華町大字植田地内

調査期間　平成10年５月１日～６月24日

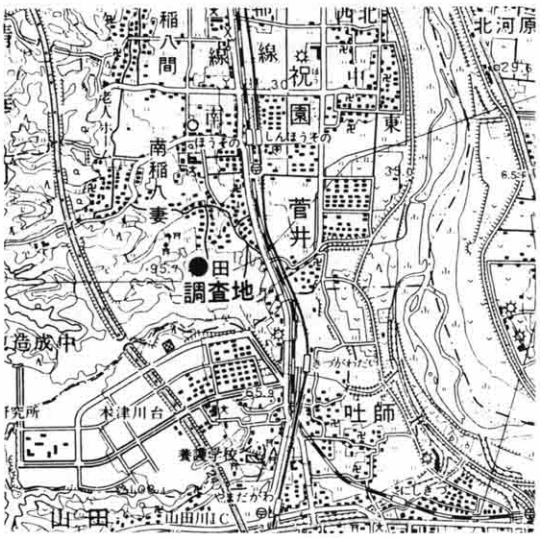
調査面積　約350㎡

はじめに　畑ノ前遺跡は昭和59・60年度に(財)古代學協會が発掘調査を実施し、弥生時代の集落跡、横穴式石室を有する古墳、奈良時代の掘立柱建物跡群が見つかり、南山城地域でも特に有名な遺跡である。京都府は府道山手幹線の建設を計画し、その計画路線内に遺跡の一部がかかることになった。今回の調査はその事前調査で、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査の概要　今回の調査地点は(財)古代學協會が調査した場所に隣接した北側の谷部にあたり、集落の中心部からはややはずれている。調査は、谷部と平坦部の調査に大きく分けられる。

谷部の東側・南側の平坦面では土坑や溝などの遺構を検出した。近世～現代と判断されるものには地境溝や小溝群があり、現地表面でもその一部が確認できる。奈良時代の遺構には、13m×３m程度の不定形な溝状の土坑や須恵器杯身が完形で出土した土坑がある。弥生時代の遺構には、土壙(木棺？)墓状の土坑、不定形な形状で底面に小ピットが穿たれた土坑、段状遺構などがある。段状遺構は谷内の斜面地に、水平方向に溝状にカットされている。その他に、木棺墓と判断される土壙を検出しているが、遺物が出土していないので、その時期は不明である。

谷内の中段における堆積土は大きく４層に分かれ、最上位の層には染付の破片が混じり、谷部下位の土層の状況から、近世以後に谷内が埋め立てられたものと推定される。その下位の層には平瓦が混じり、奈良時代の堆積土層と判断される。その下位の二層には弥生時代中期前半の土器片が多く混じっており、地山上では斜面を下る溝状の抉れが検出できた。



調査地位置図(1/50,000)

出土遺物は整理用のコンテナで約16箱分の土器や瓦が出土した。これらは谷内から出土し、廃棄されたものと考えられる。

まとめ　今回の調査では、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡・古墳などの遺構は検出できなかった。これは、今回の調査地が、畑ノ前遺跡の所在する台地の縁辺部に位置しているために、集落の中心からは、はずれていたためと考えられる。

(岩松　保)

府内遺跡紹介

82．福西2号墳

古墳の概要　京都市の西南部の洛西ニュータウンは、高層住宅団地が立ち並び、往時の面影はないが、かっては竹林の中に古墳が点在する景観であった。その古墳群の一つ、福西古墳群は、現在ではほとんどが壊滅してしまったが、内部主体に石棺を持つ特徴的な古墳群であった。この古墳群から出土した石棺は、全形がうかがえるのは福西2号墳のみであるが、破片は15地点に散在している。しかし、大半は板石として加工され、現在では、その行方すら不明なものも多い。

この古墳の発見の経緯も特異である。ことの起こりは、衣笠山麓の植木商の自宅前に置かれていた別の古墳の石棺を、パトロール中の警官が発見したことであった。京都府文化財保護課の報告を受けた京都大学考古学研究室の赤松俊秀氏・小林行雄氏・樋口隆康氏が、石棺の出土地に急行すると、その植木商の石棺を出した古墳は、既に削平されていたが、新たに、この福西2号墳の石棺が露出しているのが発見された。そこで、緊急に京都大学考古学研究室によって、発掘調査が実施されたのである。

古墳は封土がほとんど残っておらず、墳形は判らないが、小規模なものであったことは疑いない。また、葺石・埴輪もない。わずかに石棺の周囲に、簡単な石積みを施したもので、形骸化した横穴式石室ではなかったかと推定される。古墳の築造年代の1点は、7世紀中葉に比定され、北山城地域では珍しい、終末期古墳の一例である。石棺は盗掘され、棺内からは人骨・須恵器瓶子を出土したのみであった。ただし、時期的にみても、多量の副葬品があった可能性は低い。

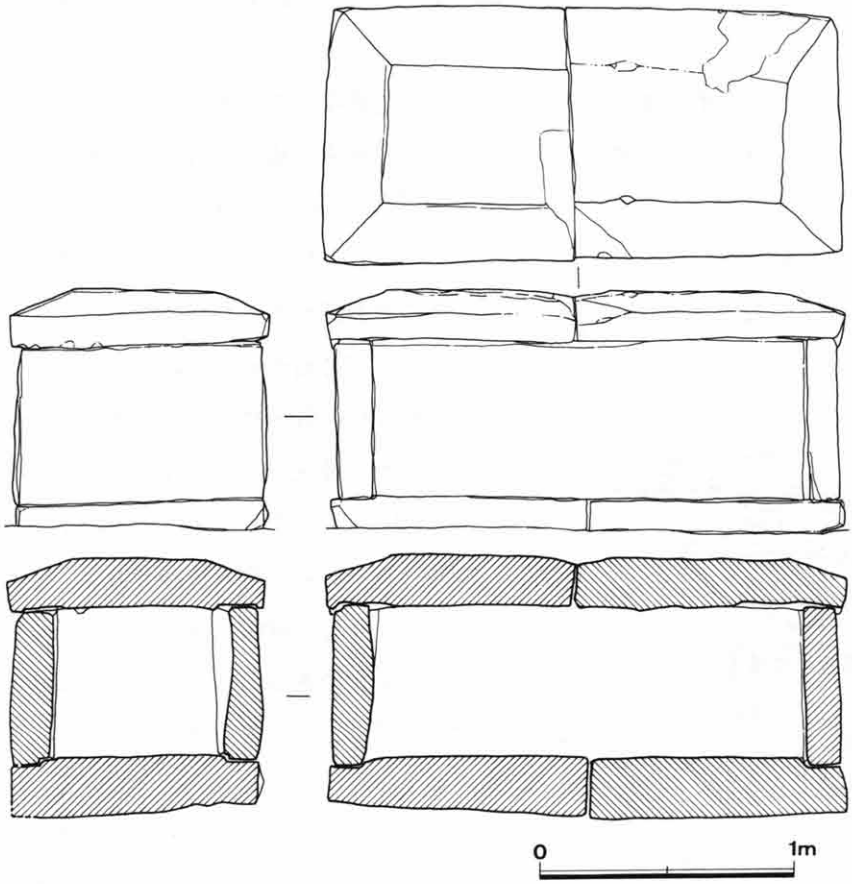
第1図　福西2号墳推定地

石棺は、底石と天井石をそれぞれ2枚、長・短側石をそれぞれ2枚の計8枚の切石を組み合わせた組合式家形石棺である。石棺は長さ2.06m、幅0.95～1.04mを測るもので、石材は播磨の竜山石(流紋岩質凝灰岩)である。組み合わせ方は、底石の短辺側を長辺よりも一段深く削り込み、長辺の側板を挟み込む型式である。また、蓋は、段状に加工した側板端面に、蓋を覆い被せたもので、丁度、印篭のような組み合わせ方をとっている。また、短側石内面には溝、長側石の短側は枘加工を施すことによって組み合わされ、あたかも木製品のように、精巧に組み立てられている。

古墳の意義　この古墳は、石棺が知られるのみで、副葬品の豊富さや古墳の規模に目を見張るといったものではない。にも関わらず、重要な点は、山城地域の古墳時代後期の動向、特に嵯峨野－乙訓にかけての氏族関係をうかがう好資料と考えられるからである。

現在、山城地域で知られる家形石棺は41例あり、４例が刳り抜き式、33例が組合式で、後者が多い(４例は不明)。分布は、長岡京市域・向日市～京都市西京区・嵯峨野周辺の３か所に集中するが、そのほとんどが底石や側石のみといった遺存部材である。これらの組合式家形石棺は、播磨地域に産出する竜山石を山城地域に搬入し、山城地域内の石棺製作組織によって生産されたと推測される。その理由は、石棺形態や組合技法に連続性が観察され、上述した３群が時期と分布とが対応して変遷するからである。すなわち、６世紀中葉～後半は嵯峨野周辺に石棺が集中し、７世紀前半には長岡京市域、７世紀中葉には福西地域に収束する。しかも、６世紀代は嵯峨野の大型前方後円墳や円墳に供給されているのに対し、７世紀以後の長岡京市域、福西古墳群のものは小型古墳が多い。嵯峨野秦氏による階層規制が弛緩したように見えるこの石棺供給先の変化は、嵯峨野における大型前方後円墳の築造が終焉し、蜂岡寺(北野廃寺)の造営へ、威信の表象をシフトさせるようで、非常に興味深い。

それでは、７世紀中葉になっても石棺を使用し続ける福西古墳群の被葬者は、いかなる集団なのだろうか？その場合、注目すべきは、山城地域に居住していたとされる、職業部民の石作氏である。大原野の石作神社は、貞観元(859)年に正六位上から従五位下に昇叙されており、現在も京都市西京区内に石作の地名が残る。石棺製作を職掌とした石作氏が、時代の流れの中で古墳という消費先を失い、その被葬地に伝統的な石棺を使用したとみるのは、私だけであろうか？



第２図　福西２号墳石棺実測図(1/30)

古墳の案内　福西古墳群は、現在、洛西ニュータウンとなっており、福西２号墳も破壊されて、現存しない。しかし、ここで触れた

石棺は、京都大学総合博物館の一階に常設されており、見学することができる。

<参考文献>

1．藤沢長治・小野山　節「京都大枝福西古墳」（『京都府文化財調査報告』第22冊　京都府教育委員会）1961

2．松崎俊郎「乙訓地域の家形石棺集成」（『都城』3）1991

【付記】

自ら語らぬ考古資料から、古墳に誰が埋葬されたかを決めることなどできるのだろうか？

古墳の被葬者を決める方法は、大きく3つにまとめられる。第1は、古墳そのものに被葬者が銘記された場合であり、京都市左京区の小野毛人墓、奈良県大安萬呂墓、上野三碑の一つ、山ノ上碑が傍らに立つ、群馬県山ノ上古墳がこのケースに当たる。第2は、文献資料とのすり合わせによって、蓋然性の高い被葬者を絞り込む場合であり、草壁皇子の墓と推定された奈良県束明神古墳、筑紫君磐井の墓と推定された福岡県岩戸山古墳がこのケースである。第3は、やや確実性に欠けるものの、古墳の副葬品や石室の類似性・親縁性に着目して共通する古墳どうしを括り、それらに共通する要素から、被葬者を絞り込む方法である。実は、古墳の被葬者を議論する場合、第1・第2のケースは非常に稀であり、資料操作を慎重に行なえば、第3の方法が有効な手段となるケースも多く、イギリスの考古学者である、V.G.チャイルドが考古学的な文化の様式論を構築する方法と、理論的に共通する。その、日本での成功例が、水野正好氏による、近江地域の滋賀郡所住の氏族と、石室形態の差異の対応を指摘した研究であるが、それは、窮隆頂天井と小型模造炊飯具の副葬といった、固有の様式を持つ墓制に着目することによって見出されたものであった。現在、埋葬施設が集団の出自をどの程度反映するか、理論的研究による詰めが問題提起されている。しかし、墓制と集団個性を見据えた議論の必要性を認識しなければ、古墳の被葬者論は、一部の感覚的な議論を別にすれば、飛鳥地域の終末期古墳や、墓誌を納めた一部の特殊な古墳でしか展開できなくなるだろう。これは、考古学によって歴史を再構成する可能性を、自ら閉ざすものと言わざるを得ない。

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集の260～261頁の註22に掲載された、本誌第63号の「府内遺跡紹介　物集女車塚古墳」についての筆者に対する批判的コメントは、この第3の方法を看過したものであり、土師氏が乙訓に居住したという誤説を「何の疑いもなく用いる考古学の手法には疑問を感じざるを得ない」であるならば、それに換わる、物集女車塚古墳の被葬者を具体的に追求するための考古学的研究方法の提起がなされてしかるべきであろう。「府内遺跡紹介」上では詳細な議論の余地が無かったが、上述した第3の方法によって、石室型式や副葬品の様式にも留意しつつ、大阪府南塚古墳、大阪府昼神車塚古墳を挙げているのであって、にもかかわらず物集女車塚古墳のみの否定によって、考古学の方法自体を否定するという姿勢には、「疑問を感じざるを得ない」。なお、この論争は、古墳の被葬者論の根幹に関連した問題であると思われるので、広く、識者のご意見をおうかがいしたい。

（河野一隆）

【編集部より】

第67号掲載の荒川　史・魚津知克・内田真雄「粘土槨内への鉄製農工漁具の副葬－庵寺山古墳の調査成果から－」で、10頁の6・7行目の「大阪府高槻市弁天山C1号墳」を「弁天山B2号墳」へ、執筆者から訂正の申し出がありました。したがって、注22の「弁天山C1号墳」も、「弁天山B2号墳」へ変更をお願いします。

長岡京跡調査だより．66

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成10年５月27日、６月24日、７月22日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内３件、左京域４件、右京域15件であり、京外の12件を併せると34件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。このうち、山城国府跡第48次を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1998年７月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第360次	7ANEYT－5	向日市鶏冠井町山畑2	(財)向日市埋文	5/22～6/5
2	宮内第361次	7ANEHJ－5	向日市鶏冠井町祓所36-4.36-5の一部	(財)向日市埋文	5/22～6/1
3	宮内第362次	7ANFOC－6	向日市上植野町御塔道7－2	(財)向日市埋文	7/14～8/17
4	左京第414次	7ANMTD－5	長岡京市神足寺田1－9・1－10・1－13・30－2、神足典薬1－5・1－7・1－12	(財)長岡京市埋文	97.10/1～5/31
5	左京第417次	7AN	京都市伏見区納所大野京都競馬場内	(財)京都市埋文研	3/3～4/21
6	左京第418次	7ANVKC－1	京都市南区久世東土川町178他	(財)京都市埋文研	6/18～
7	左京第419次	7ANFHM－7	向日市上植野町橋爪1－5	(財)向日市埋文	7/3～7/23
8	右京第589次	7ANSKT－3	乙訓郡大山崎町下植野町門田地内	(財)京都府埋文	4/13～
9	右京第598次	7ANIAE－11	長岡京市今里四丁目255－1	(財)長岡京市埋文	3/23～5/1
10	右京第600次	7ANKYD－2	長岡京市長岡一丁目306－2・307－2	(財)長岡京市埋文	4/20～5/1
11	右京第601次	7ANIHY－3	長岡京市今里彦林9－1	(財)長岡京市埋文	4/20～5/19
12	右京第602次	7ANQMH－3	長岡京市勝龍寺巡り原1－1他	(財)長岡京市埋文	5/6～5/28
13	右京第603次	7ANIFC－6	長岡京市今里更ノ町23の一部	(財)長岡京市埋文	5/11～6/5
14	右京第604次	7ANJKK－5	長岡京市長法寺北畠10の一部・15の一部	(財)長岡京市埋文	5/18～7/6
15	右京第605次	7ANGMM－1	長岡京市井の内宮山8番地他	(財)長岡京市埋文	5/25～
16	右京第606次	7ANMBZ－1	長岡京市神足二丁目5	(財)長岡京市埋文	6/3～9/10
17	右京第607次	7ANKST－9	長岡京市開田二丁目223－6	(財)長岡京市埋文	6/5～6/17
18	右京第608次	7ANMKI－8	長岡京市東神足二丁目6・7－2・7－3	(財)長岡京市埋文	6/8～7/15
19	右京第609次	7ANMSM－1	長岡京市神足一丁目3・7	(財)長岡京市埋文	6/9～8/3
20	右京第610次	7ANJKD－2	長岡京市長法寺川原谷15－2他	(財)長岡京市埋文	6/22～7/1
21	右京第611次	7ANHTC－3	長岡京市栗生田内15－1	(財)長岡京市埋文	7/13～8/3
22	右京第612次	7ANQSE－3	長岡京市久貝二丁目116－1	(財)長岡京市埋文	7/15～8/3
23	物集女城跡第5次	9ZMANY－5・3NNANK－48	向日市物集女町中条11・12	(財)向日市埋文	5/19～6/17
24	笹屋遺跡第3次	7ASBKM	向日市寺戸町北前田29－2	(財)向日市埋文	4/21～5/15
25	下植野南遺跡隣接地	IK25	大山崎町下植野五条本	(財)京都府埋文	5/12～6/末
26	向日市立会98029次	7ANEOK	向日市鶏冠井町御屋敷地内	(財)向日市埋文	5/28～
27	山城国府内跡第48次	7XYS'RK14	大山崎町大山崎竜光29	大山崎町教委	3/17～6/12
28	山城国府内跡第49次	7YYMS'NT－5	大山崎町字大山崎小字西谷2－5	大山崎町教委	5/28～10/上

29	山城国府内跡第50次	7XYS'FH－14	大山崎町字大山崎小字井畑20－3	大山崎町教委	7/13～7/14
30	大山崎町26次	7YYMS'SS－4	大山崎町字大山崎小字白味才－14	大山崎町教委	6/1～6/24
31	大山崎町27次	7YYMS'SS－5	大山崎町字大山崎小字白味才－14	大山崎町教委	5/27～6/24
32	長野丙古墳群第４次	4PHANN－4	向日市物集女町長野4－233	(財)向日市埋文	7/8～7/17
33	寺戸大塚古墳第６次	4PHBSM－6	向日市寺戸町芝山2－5.2－6	(財)向日市埋文	6/29～9/30
34	大薮遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文研	

山城国府跡第48次

大山崎町教育委員会

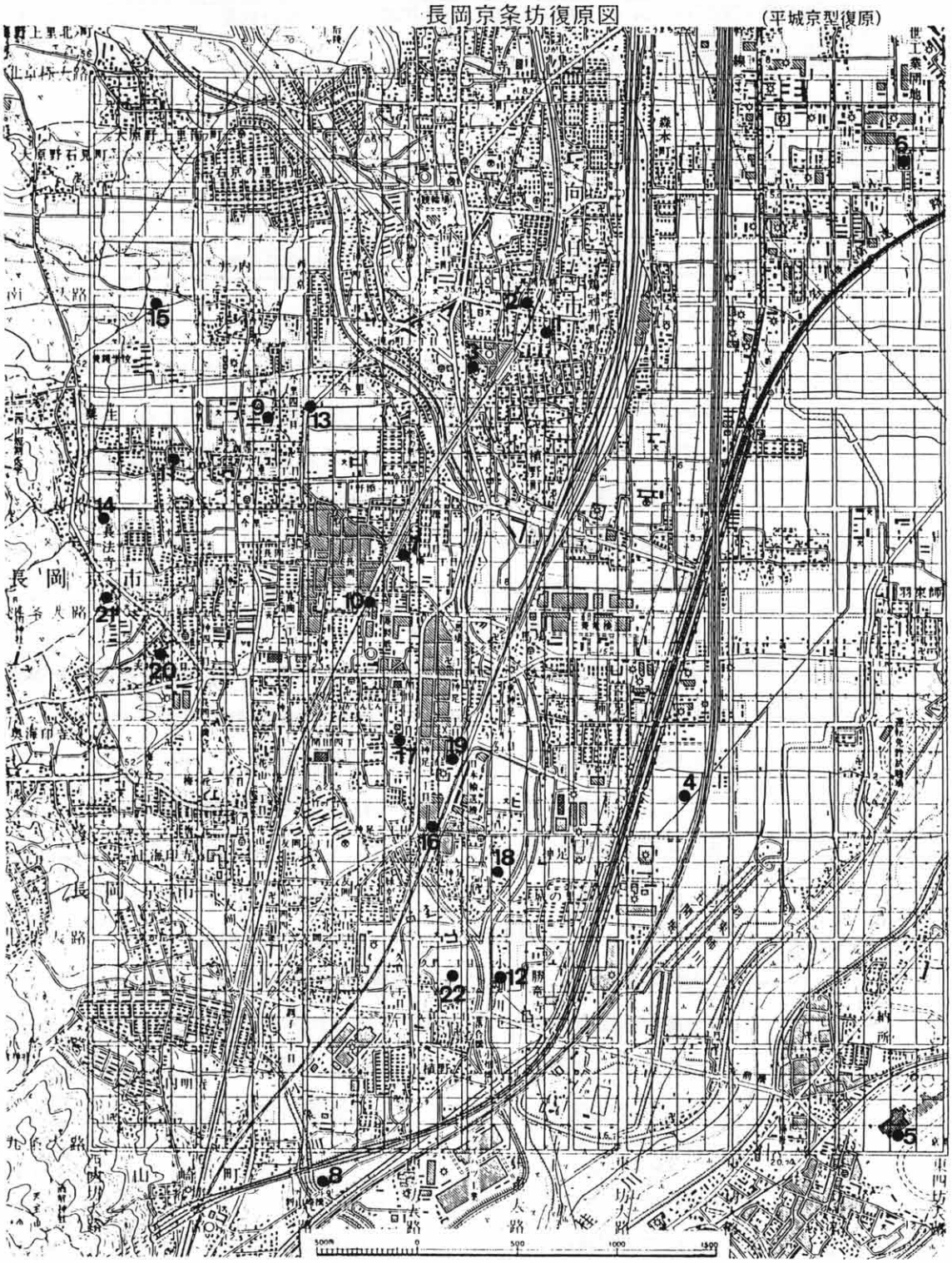
阪急大山崎駅の北に位置する今回の調査地は、大山崎遺跡群に属し、山城国府跡としてもよく知られる。発掘面積は176m²である。調査成果としては、平安時代前期の山陽道に関する遺構や、室町時代の工房跡と推定される遺構が確認されたことがあげられる。

山陽道の検出にあたっては、道路側溝もあわせて確認された。道路は、路面幅12mで、両側溝を含めると14mにもなる。これらは1989年に約200m離れた地点で発掘された山陽道とつながっていると思われる。なお、検出された山陽道の南側に隣接して、より新しい時期の道路面と北側側溝も検出された。また、調査地からは掘立柱建物跡を構成する多くのピットも検出され、国府と関連した何らかの施設があったと想定される。

一方、工房跡と推定される室町時代の建物跡の屋敷裏からは、当時、油の生産に使用していたと考えられる木製の臼が出土した。これは、直径、高さともに70cmのほぼ完形品として出土した。そのそばからは、「締木(しめぎ)」とみられる直径６cmの丸太材２本も検出された。

大山崎町は、平安時代から荏胡麻(えごま)油の生産が盛んで、油生産者が離宮八播宮を中心に「油座」と呼ばれる同業者組合を組織していた。油は現在の中部地方や九州へも出荷され、当時、同町は西日本有数の荏胡麻の生産拠点であった。しかし、８年前、周辺部の調査で甕を発見したおりに、その中から荏胡麻が検出されたことはあったものの、当時の荏胡麻油の製造法については今日も詳しくはわかっていない。資料として、信貴山朝護孫子寺の国宝「信貴山縁起絵巻」に荏胡麻を搾る「閉木」の一部が描かれているものの、製造器具と思われる遺物が出土したのは今回が初めてである。したがって、これらの発見は山陽道の確認とあわせて、当時の荏胡麻の生産様式の解明を含め、大山崎町の様子を明らかにする上で非常に貴重な資料になると思われる。

(米本光徳)



(番号は一覧表・本文()内と対応)

調査地位置図

センターの動向(10.5～7)

1．できごと

5.1　畑ノ前遺跡(精華町)発掘調査開始

11　桑原口遺跡(宮津市)発掘調査開始

12　橋爪遺跡(久美浜町)発掘調査開始

14～15　全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：福島市)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、今村正寿主事出席

18　南谷古墳群C支群(久美浜町)発掘調査開始

20～27　国際協力事業団(JICA)研修生7名受け入れ

21　井上満郎理事、浦入遺跡(舞鶴市)現地視察

22　シミズ谷古墳群発掘調査終了(4.20～)

26　成勝寺跡関係者説明会

27　長岡京連絡協議会

29　退職職員辞令交付(別掲)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：和歌山市)福嶋利範事務局次長、安田正人課長補佐出席
教員職出向職員研修「古墳とその時代」、講師：堤　圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三・竹下士郎主査調査員、中村周平調査員受講

6.1　新規採用職員辞令交付(別掲)

5　木村英男常務理事・事務局長、下植野南遺跡(大山崎町)現地視察

8　墓ノ谷古墳群(弥栄町)発掘調査開始

10　内里八丁遺跡関係者説明会
成勝寺跡発掘調査終了(4.22～)

11～12　全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：京都市)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範・安藤信策事務局次長小山雅人課長、安田正人主幹出席

15　職員研修(於：当センター)講師：野々口陽子調査員「京都府における古墳成立期の墳墓副葬遺物の研究」

16　畑ノ前遺跡関係者説明会

17　監事監査

19　府庁開庁記念式典(於：府民ホール)木村英男常務理事・事務局長出席
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市)森島康雄・河野一隆調査員出席

24　長岡京連絡協議会
畑ノ前遺跡発掘調査終了(5.1～)

25　第53回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)、樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、川上貢・上田正昭・足利健亮・井上満郎・堤　圭三郎・中村　彰・中谷雅治各理事及び京極隆夫監事出席

26　桑原口遺跡(宮津市)関係者説明会

27　第82回埋文セミナー開催(別掲)

7.1　赤ケ平遺跡(木津町)発掘調査開始

1～2　木村英男常務理事・事務局長、浅後谷南遺跡(網野町)ほか現地視察

2　桑原口遺跡発掘調査終了(5.11～)

3　橋爪遺跡(久美浜町)関係者説明会、発掘調査終了(5.12～)

7　左坂古墳群(大宮町)発掘調査開始

8　通り谷城跡(峰山町)発掘調査開始

14　墓ノ谷古墳群(弥栄町)発掘調査終了(6.8～)

14～15　堤　圭三郎理事、南谷古墳群C支群(久美浜町)ほか現地視察

16　川向古墳群(舞鶴市)現地説明会(67名)

16　出土品取扱基準検討会議(於：京都府教育庁)小山雅人課長出席

17　職員研修(於：当センター)講師：伊野近富係長・村田和弘調査員「古代の官衙と官道」
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：和歌山市)
小山雅人課長出席

22　長岡京連絡協議会

24　川向古墳群発掘調査終了(4.18～)
下植野南遺跡(大山崎町)関係者説明会

30　教員職出向職員研修「丹波の古墳現地研修」、講師：堤　圭三郎理事、米本光徳・竹下士郎主査調査員、中村周平調査員受講
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック総務担当課長会議(於：大阪市)福嶋利範事務局次長、安田正人主幹出席

2．普及啓発活動

6.27　第82回埋文セミナー(於：網野町アミティー丹後)『古代、丹後の謎』細川康晴氏「卑弥呼の頃の丹後について」、金木泰憲氏「網野町内の発掘調査について」、竹原一彦「浅後谷南墳墓の発掘調査について」

3．人事異動

5.31　土橋　誠主任調査員退職(京都府府民労働部文化芸術室から(財)京都文化財団京都文化博物館へ)、古瀬誠三主査調査員退職(京都府立総合資料館へ)、有井広幸調査員退職(京都府教育庁へ)

6.1　藤井　整調査員・福島孝行調査員採用(京都府教育庁から)

(安藤信策)

受贈図書一覧(10. 4～7)

(財)北海道埋蔵文化財センター

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第121集　茂別遺跡、同第122集　西桔梗１遺跡(２)、同第123集　滝里遺跡群Ⅷ、同第124集　キウス４遺跡(２)、同第125集　キウス５遺跡(５)、同第126集　キウス５遺跡(６)、同第127集　キウス７遺跡(５)、同第128集　ユカンボシC15遺跡(１)、同第129集　ユカンボシE10遺跡、白滝遺跡群を掘るⅠ

苫小牧市埋蔵文化財調査センター

柏原27・ニナルカ・静川５・６遺跡

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第169集　槻ノ木１遺跡、同第170集　松山・羽黒平１遺跡、同第221集　津山遺跡、同第231集　平野遺跡・今須４遺跡、同第232集　岡町２遺跡、同第233集　西張２遺跡、同第234集　野尻１遺跡Ⅰ、同第235集　大和田遺跡・寺山３遺跡ほか、同第236集　幸畑４遺跡・幸畑１遺跡、同第237集　隈無１遺跡・隈無２遺跡ほか、同第240集　小奥戸２遺跡・小奥戸４遺跡、同第241集　長谷遺跡、同第242集　外馬屋前田１遺跡

(財)いわき市教育文化事業団

年報８、研究紀要９、いわき市埋蔵文化財調査報告書第53冊　上ノ内遺跡・湯長谷館跡、同第54冊　折返Ａ遺跡、根岸遺跡

(財)茨城県教育財団

年報17、研究ノート７号

(財)ひたちなか市文化振興公社文化財調査事務所

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集　武田石高遺跡、同第16集　船窪Ⅰ

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

年報第３号、ひたちなか市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第１集　原の寺瓦窯跡発掘調査報告書、同第２集　ひたちなか市中区古墳発掘調査報告書、同第４集　津田若宮遺跡発掘調査報告書、同第５集　新平塙古墳発掘調査報告書

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第163集　二之宮宮下東遺跡、同第230集　下芝五反田遺跡、同第234集　芦田貝戸遺跡ほか、同第236集　東町関下遺跡

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集　富士見一丁目遺跡、同第190集　中堀遺跡、同第191集　今井川越田遺跡Ⅲ、同第192集　今井条里遺跡、同第193集　地神／塔頭、同第194集　新屋敷遺跡Ｄ地区、同第195集　北島遺跡Ⅳ、同第196集　末野遺跡Ⅰ、同第197集　宿東遺跡、同第198集　砂田前遺跡、同第199集　築道下遺跡Ⅱ、同第200集　薬師堂根遺跡、同第201集　南久我原遺跡、同第202集　中台遺跡、同第203集　大杉遺跡、同第204集　耕地遺跡、同第205集　樋の上／皇山遺跡、年報18、研究紀要第14号

(財)千葉県文化財センター

千葉県文化財センター調査報告第343集　成東町嶋戸東遺跡発掘調査報告書、同第344集　木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書、研究紀要18、研究連絡誌第52号

(財)東総文化財センター

(財)東総文化財センター発掘調査報告書第14集　大道筋遺跡、同第15集　寒風城跡、同第17集　傍示戸遺跡・城ノ戸遺跡・新城跡、同第18集　長者台遺跡

(財)君津郡市文化財センター

年報No.14、15、研究紀要Ⅷ、(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第138集　寺沢出戸遺跡、同第139集　根崎遺跡・寺ノ上遺跡、同第140集　椿古墳群、同第142集　美生遺跡群Ⅳ、同第143集　姥田遺跡発掘調査報告書

(財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第44、50、52、54集　多摩ニュータウン遺跡、同第53集　尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ、資料目録10、尾張藩上屋敷遺跡発掘調査概要Ⅵ、汐留遺跡Ⅳ

(財)長野県埋蔵文化財センター

(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書25　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22、同27　松原遺跡、同28　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14、同29　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25、同30　北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書１、同31　北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書２、同32　北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書３、同33　北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書４、同34　北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書５

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集　沖ノ羽遺跡Ⅱ、同第83集　萩清水遺跡・三本木新田Ｂ遺跡、同第84集　中ノ沢遺跡、同第86集　旧得法寺跡、同第87集　上郷遺跡Ⅱ、同第88集　屋敷田Ⅲ遺跡、年報平成９年度

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第９集　五社遺跡発掘調査報告、埋蔵文化財年報９、埋蔵文化財調査概要平成９年度、富山考古学研究紀要創刊号

(財)石川県埋蔵文化財センター

藤井サンジョガリ遺跡・高畠テラダ遺跡・高畠カンジタ遺跡、八幡遺跡Ⅰ、荻市遺跡、年報９、18年のあゆみ

金沢市埋蔵文化財センター

金沢市文化財紀要138　金沢市押野西遺跡Ⅱ、同139　金沢市北塚遺跡、同141　磯部東遺跡、同142　千木東遺跡、同143　長田町遺跡・長町遺跡・穴水町遺跡、同144　近岡遺跡、同145　平成９年度金沢市埋蔵文化財調査年報

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第29集　西田遺跡、同第38集　西屋敷遺跡、同第47集　城ヶ谷７号墳・片山城跡

各務原市埋蔵文化財調査センター

各務原市文化財調査報告第23号　須衛天狗谷古墳群・天

狗谷窯址群発掘調査報告書

(財)愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財情報13、年報平成９年度

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第16集　上品野蟹川遺跡、同第19集　駒前第１号墳、同第20集　市内遺跡調査報告Ⅰ、平成９年度年報、研究紀要第６輯

(財)滋賀県文化財保護協会

レトロ・レトロの展覧会、紀要第10、11号

大津市埋蔵文化財調査センター

大津市埋蔵文化財調査報告書19　太鼓塚遺跡発掘調査報告書

能登川町埋蔵文化財センター

能登川町埋蔵文化財調査報告書第44集　斗西遺跡、同第45集　中沢遺跡・斗西遺跡

(財)大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第15集　巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書、同第25集　志紀遺跡(その４)、史跡池上曽根96、丹上遺跡(その９)・観音寺遺跡(その４)、池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅦ、研究調査報告第１集、大阪府文化財研究第13号

(財)大阪市文化財協会

天満本願寺跡発掘調査報告Ⅲ、同Ⅳ、長原・瓜破遺跡発掘調査報告ⅩⅠ、長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ、南住吉遺跡発掘調査報告、桑津遺跡発掘調査報告、山之内遺跡発掘調査報告、住友銅吹所跡発掘調査報告、研究紀要創刊号

(財)枚方市文化財研究調査会

枚方市文化財年報19

高槻市立埋蔵文化財調査センター

高槻市文化財調査概要ⅩⅩⅣ　嶋上遺跡群22、高槻市文化財年報平成８年度、史跡・今里塚古墳、安満宮山古墳

桜井市立埋蔵文化財センター

1992年度発掘調査報告書、同1993年度、大福遺跡調査報告、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集　平成７年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書

(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育文化財団調査報告書54　石脇第３遺跡・石脇８・９号墳ほか、同55　小浜ワラ畑遺跡・小浜小谷遺跡ほか、同56　米子城跡21遺跡、同57　福成早里遺跡、同58　御内谷遺跡群

(財)鳥取市教育福祉振興会埋蔵文化財調査センター

平成９年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書、史跡鳥取城跡附太閤ケ原太鼓御門発掘調査報告書、布勢墳墓群、平成９年度見遺跡群(その１)、平成９年度見遺跡群(その２)、平成９年度見遺跡発掘調査報告書、古市遺跡Ⅰ、秋里遺跡(東皆竹地区)、秋里遺跡(汚水４号幹線)

倉敷埋蔵文化財センター

年報４、倉敷埋蔵文化財発掘調査報告第７集　湾戸７号墳

(財)広島市文化財団

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第21集　巣取遺跡発掘調査報告、同第22集　梨ヶ谷遺跡発掘調査報告、味な考古学、弥生時代の土笛づくり

(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター

文化財センター調査報告書第８冊　古慈喜城跡発掘調査報告書、同第10冊　下上戸遺跡発掘調査報告書、同第13冊　後迫１号遺跡発掘調査報告書、同第15冊　小越遺跡発掘調査報告書、同第18冊　上溝上３号遺跡発掘調査報告書

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

年報平成９年度、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度、県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度、空港跡地遺跡発掘調査概報　平成９年度、西打遺跡・高松城跡(西の丸町)、原中村遺跡、松並・中所遺跡、旧練兵場遺跡、研究紀要Ⅵ

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

埋蔵文化財発掘調査報告書第68集　四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ、同第69集　登畑遺跡

久留米市埋蔵文化財センター

筑後国府跡　久留米市文化財調査報告書第131集、京隈小路遺跡　同第132集、旗原遺跡　同第133集、筑後国府跡　同第134集、筑後国府跡　同第135集、筑後国府跡　同第136集、大善寺遺跡Ⅱ　同第137集、鑓水古墳群　同第138集、筑後国府跡・国分寺跡　同第139集、久留米市内遺跡群　同第140集

小樽市教育委員会

塩谷６遺跡Ⅲ　小樽市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集、文庫歌遺跡Ⅲ　同第16集

上ノ国町教育委員会

上之国勝山館跡ⅩⅨ、原歌遺跡Ｓ地点

平賀町教育委員会

平賀町埋蔵文化財報告書第23集　大光寺新城跡遺跡

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告第99集　岩手県内遺跡発掘調査報告書平成８年度

大船渡市教育委員会

大洞貝塚、野尻Ⅱ遺跡

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第221集　富沢・泉崎浦・山口遺跡11、同第226集　南小泉遺跡

田尻町教育委員会

田尻町文化財調査報告書第３集　新田棚跡推定地

山形県教育庁文化財課

山形県中世城館遺跡調査報告書第２集(村山地区)、同第３集(庄内・最上地域)、山形県埋蔵文化財調査報告書第198集　分布調査報告書24、同第199集　分布調査報告書25

栃木県教育委員会

栃木県埋蔵文化財調査報告書第147集　諏訪山・諏訪山北遺跡、同第200集　寺野東遺跡Ⅴ、同第201集　寺野東遺跡Ⅵ、同第204集　中村遺跡・鷲久根遺跡・西久保遺跡、同第217集　栃木県埋蔵文化財保護行政年報20

渋川市教育委員会

渋川市発掘調査報告書第36集　八木原沖田Ⅳ・Ⅴ遺跡、同第37集　市内遺跡Ⅶ、同第38集　行幸田南原遺跡、同第39集　石原東遺跡Ⅱ、同第42集　石原東遺跡Ⅲ、同第46集　石原西浦遺跡Ⅱ、同第47集　半田薬師遺跡、同第51集　八木原沖田Ⅶ遺跡、同第52集　八木原沖田Ⅷ・Ⅸ遺跡、同第58集　有馬久宮間戸遺跡、同第59集　有馬小貝戸遺跡、同第62集　川島久保内・馬場遺跡、同第63集

八木原沖田Ⅹ遺跡

群馬町教育委員会

群馬町埋蔵文化財調査報告第45集　井出西下井出Ⅱ・東下井出Ⅱ・Ⅲほか、同第46集　西国分六ッ割遺跡、同第48集　町内遺跡Ⅴ、かみつけの里博物館開館記念特別展躍動する造形

志木市教育委員会

西原大塚の遺跡

入間市教育委員会

入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第19集　水窪遺跡第３次調査、同第20集　坂東山遺跡第６次調査

千葉市教育委員会

埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書　平成９年度、地蔵作遺跡、小中台２遺跡

市原市教育委員会

平成９年度市原市内遺跡発掘調査報告

木更津市教育委員会

木更津市内遺跡発掘調査報告書、千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅳ

東京都北区教育委員会

北区埋蔵文化財調査報告書第23集　袋低地遺跡Ⅱ

狛江市教育委員会

小足立中村南遺跡、狛江市文化財調査報告書第15集　狛江市埋蔵文化財調査概報Ⅰ、同第16集　狛江市埋蔵文化財調査概報Ⅱ、同第17集　狛江市埋蔵文化財調査概報Ⅲ

川崎市教育委員会

川崎市文化財調査集録第32集、久地西前田横穴群第１次調査、同第２次調査

鎌倉市教育委員会

山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書、史跡建長寺境内発掘調査報告書、東勝寺跡、亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査報告書、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14　平成９年度発掘調査報告、浄土庭園と寺院

長坂町教育委員会

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集　小屋敷遺跡、同第14集　別当西遺跡

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告第53集　八幡裏遺跡Ⅰ、同第55集市内遺跡Ⅳ、同第56集　上田原遺跡、同第57集　藤之木遺跡、同第58集　大畑遺跡、同第59集　市内遺跡Ⅴ、同第60集　史跡上田城跡、同第61集　八幡裏遺跡Ⅱ、同第62集　下町田遺跡、同第63集　古城遺跡、同第64集　金井裏遺跡Ⅱ、同第65集　市内遺跡Ⅵ、同第66集　浦田Ａ・宮脇遺跡、同第67集　八幡裏遺跡Ⅲ、同第68集　金鉾遺跡、同第69集　西之手遺跡Ⅱ、同第70集　宮原遺跡、同第71集　平成９年度市内遺跡

上野原町教育委員会

上野原町埋蔵文化財調査報告書第７集　野田尻Ⅰ遺跡、同第８集　用竹(殿村)遺跡

新発田市教育委員会

新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ

吉田町教育委員会

町史よしだ創刊号、町史研究よしだ第２号

高岡市教育委員会

高岡市埋蔵文化財調査報告第１冊　麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告、高岡市埋蔵文化財調査概報第34冊高岡城遺跡調査概報、同第35冊　市内遺跡調査概報Ⅴ、同第36冊　市内遺跡調査概報Ⅵ、同第37冊　高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅷ

魚津市教育委員会

紀要第４号、山下Ⅱ遺跡発掘調査報告書

福岡町教育委員会

福岡町埋蔵文化財調査報告書７　下老子笹川遺跡発掘調査報告書

八尾町教育委員会

八尾町埋蔵文化財調査報告第11集　翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書１、同第12集　翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書２

下村教育委員会

下加茂遺跡

小松市教育委員会

戸津古窯跡群Ⅲ

松任市教育委員会

横江Ｂ遺跡、一塚オオミナクチ遺跡Ⅱ、相川新遺跡、北安田キタドウダ遺跡、福正寺ゴコメマチ遺跡

大垣市教育委員会

大垣市埋蔵文化財調査報告書第４集　荒川南遺跡、同第５集　大垣市遺跡詳細分布調査報告書

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財調査報告書第48集　西軒遺跡、同第49集　西袋遺跡、同第50集　高田ヶ原遺跡第８次発掘調査報告書、同第51集　殿ヶ谷遺跡第５次発掘調査報告書

稲沢市教育委員会

稲沢市文化財調査報告ⅩLⅥ　稲沢市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第42集　市場遺跡・市杵嶋神社古墓群・牟呂王塚古墳、同第43集　磯辺王塚古墳、同第44集　水神貝塚第２貝塚、同第45集　市道遺跡Ⅲ、同第48集　築根遺跡・大海津遺跡Ⅰ

四日市市教育委員会

四日市市遺跡調査会文化財調査報告書ⅩⅤ　北中寺遺跡３、四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書20　公事出古墳群・公事出遺跡、一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ、四日市市文化財保護年報８

上野市教育委員会

上野市文化財調査報告39　久米山48号墳発掘調査報告、同62　泥畑遺跡発掘調査報告、上野市埋蔵文化財年報４

安濃町教育委員会

安濃町埋蔵文化財発掘調査報告書11　宮ノ裏Ｂ遺跡発掘調査報告書

八日市市教育委員会

八日市市文化財調査報告19　建部城遺跡発掘調査報告書、同20　大森陣屋遺跡発掘調査報告書

竜王町教育委員会

竜王町埋蔵文化財報告書第２集　田中遺跡第５次調査報告書

今津町教育委員会

今津町文化財調査報告書第19集　町内遺跡発掘調査概要報告書、同第20集　妙見山遺跡発掘調査概要報告書

野洲町教育委員会

野洲町文化財資料集1998-1　平成９年度野洲町内遺跡発掘調査概要

日野町教育委員会
日野町埋蔵文化財発掘調査報告書　第11、12集
藤井寺市教育委員会
石川流域遺跡群発掘調査報告ＸⅢ　藤井寺市文化財報告第17集、大阪の前期古墳
高石市教育委員会
江戸時代の高石、高石市文化財発掘調査概要1997-1　大園遺跡他の発掘調査概要
豊中市教育委員会
豊中市文化財調査報告第38集　桜井谷窯跡群、同第42集　豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成９年度、同第43集　豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成９年度、とよなか文化財ブックレットNo.５通史編Ⅴ、同No.６通史編Ⅵ
泉南市教育委員会
古代寺院の成立と展開、泉南市遺跡群発掘調査報告書ＸⅣ　泉南市文化財調査報告書第30集、同ＸⅤ　泉南市文化財調査報告書第31集
柏原市教育委員会
柏原市文化財概報1997-Ⅰ　柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1997年度、同1997-Ⅱ　柏原市所在遺跡発掘調査概報1997年度、同1997-Ⅲ　平野・大県古墳群、同1997-Ⅳ　奥山遺跡発掘調査概報、田辺遺跡の鉄と銅
八尾市教育委員会
八尾市文化財紀要８　心合寺山古墳第５次発掘調査概報、八尾市文化財調査報告38　八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告Ⅰ、同39　八尾市内遺跡平成９年度発掘調査報告Ⅱ
河内長野市教育委員会
河内長野市文化財調査報告書第29輯　河内長野市埋蔵文化財調査報告書ＸⅣ、河内長野市遺跡調査会報ＸⅨ　上原遺跡・塚穴古墳
和泉市教育委員会
和泉市埋蔵文化財発掘調査概報８、史跡池上曽根96
岸和田市教育委員会
岸和田市文化財発掘調査概要23　平成９年度発掘調査概要、岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書５　吉井遺跡
阪南市教育委員会
阪南市埋蔵文化財報告ＸＸⅢ　阪南市埋蔵文化財発掘調査概要ＸⅢ、同ＸＸⅣ　貝掛遺跡Ⅱ
大阪狭山市教育委員会
大阪狭山市文化財報告書16　大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書８
熊取町教育委員会
熊取町埋蔵文化財調査報告第30集　熊取町遺跡群発掘調査概要報告書ＸⅡ
龍野市教育委員会
龍野市文化財調査報告18　奥村廃寺、同19　中垣内天神山・三昧山古墳群、同20　小神辻の堂遺跡
加古川市教育委員会
加古川市文化財調査報告16　開かれた古墳時代のタイムカプセル
和田山町教育委員会
和田山町文化財調査報告書第８集　法興寺跡
竹野町教育委員会
竹野町文化財調査報告書第12集　竹野町遺跡分布地図、同第13集　竹野町の中世城郭
加東郡教育委員会
加東郡埋蔵文化財報告20　上滝野・清蔵寺遺跡
八鹿町教育委員会
但馬史研究第21号、但馬考古学第10集
中町教育委員会
中町文化財報告17　思い出遺跡Ⅰ
加美町教育委員会
加美町文化財報告２　金蔵山金蔵寺遺跡
橿原市教育委員会
橿原市埋蔵文化財調査概要15　橿原市埋蔵文化財発掘調査概報
広陵町教育委員会
広陵町指定文化財　平成７年度
出雲市教育委員会
出雲市歴史博物館、白枝荒神遺跡、西谷墳墓群測量調査報告書、上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書
浜田市教育委員会
古市遺跡発掘調査概報、横路遺跡(土器土地区)下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、横路遺跡(原井ヶ市地区)浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
岡山市教育委員会
岡山市埋蔵文化財調査の概要　1996年度、造山第４号古墳、すくも山遺跡発掘調査報告、岡山城内堀、史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告
広島県教育委員会
中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告８　吉川元春館跡
阿東町教育委員会
山口県阿東町埋蔵文化財報告第１集　宮ヶ久保遺跡
三好町教育委員会
三好町埋蔵文化財調査報告書第１集　大柿遺跡
三野町教育委員会
加茂野宮遺跡
高松市教育委員会
蛙股遺跡、居石遺跡
福岡県教育委員会
九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告48～52、貝元遺跡Ⅰ、鈴ヶ山遺跡・広ミ遺跡、上桑野遺跡(宇野代遺跡Ⅱ)、大塚本遺跡、郷ヶ原遺跡、穴田古墳群・覗山城跡、諸田仮塚遺跡、以来尺遺跡Ⅱ、鷹取五反田遺跡Ⅰ・稲崎Ａ・Ｂ遺跡、下唐原宮園遺跡、下林西田遺跡　福岡県文化財調査報告第132集、下高橋馬屋元遺跡２　同第133集、下原遺跡　同第134集、松崎城跡　同第135集、福岡県埋蔵文化財発掘調査年報平成７年度、大宰府史跡平成９年度発掘調査概報
北九州市教育委員会
北九州市文化財調査報告書第73集　冷水遺跡第２地点、同第74集　片伊田遺跡ＸⅠ区、同第75集　廣隆寺跡、同第76集　乙丸遺跡第２地点、同第77集　紅梅Ａ遺跡第３地点、同第78集　小倉城跡Ⅳ、同第79集　中尾遺跡、同第80集　天神遺跡
八女市教育委員会
八女市文化財調査報告書第51集　辻の西遺跡、同第52集　高島遺跡、同第53集　八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概要４
大野城市教育委員会

大野城市の文化財第30集　大野城市の石碑、同第51集　谷川・池田・池ノ上遺跡、同第52集　石勺遺跡Ⅲ、同第53集　後原遺跡Ⅰ

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書第80集　唐津市内遺跡確認調査13、同第81集　唐津市内遺跡確認調査14、同第82集　八幡溜第Ⅱ遺跡２、同第83集　雲透遺跡Ⅱ

鎮西町教育委員会

鎮西町文化財調査報告書第15集　松浦鎮信陣跡・細川忠興陣跡、同第16集　塩鶴遺跡

佐伯市教育委員会

天祐館遺跡、樫野古墳

大分県教育庁文化課

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書５、大分県文化財調査報告書第99輯　二本木遺跡、同第100輯　大分の前方後円墳、かわじ池遺跡、佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群、日田市高瀬遺跡群の調査２、大分県埋蔵文化財年報６

久住町教育委員会

尾首遺跡・市第Ⅴ遺跡

本耶馬溪町教育委員会

下屋形遺跡

三光村教育委員会

三光村文化財調査報告書第２集　三光村の遺跡、三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ

宮崎市教育委員会

椎屋形第１遺跡・椎屋形第２遺跡・上の原遺跡、宮崎市文化財調査報告書第33集　大町遺跡、同第34集　京園遺跡、同第35集　二月田遺跡・芋字遺跡

串間市教育委員会

串間市文化財調査報告書第17集　市内遺跡発掘調査報告書

都城市教育委員会

都城市文化財調査報告書第44集　鶴喰遺跡

田野町教育委員会

田野町文化財調査報告書第17集　長藪遺跡、同第18集　元野地区遺跡、同第19集　八重地区遺跡、同第20集　町内遺跡発掘調査、同第21集　永迫第２遺跡、同第22集　馬渡第１遺跡、同第24集　元野地区遺跡、同第25集　七野第４遺跡、同第27集　元野河内遺跡、同第28集　鹿毛第３遺跡

沙流川歴史館

平取町文化財調査報告書Ⅸ　ヌタプ遺跡・川向１遺跡、同Ⅹ　二風谷３遺跡

北上市立博物館

江釣子古墳群とその時代、みちのく民俗村ガイドブック

東北歴史資料館

里浜貝塚Ⅹ、北上川下流域・三陸沿岸の旧石器時代遺跡の分布調査報告書

(社)日本金属学会附属金属博物館

紀要第29号

秋田県立博物館

館報平成９年度、研究報告第23号

福島県立博物館

発掘ふくしま２

栃木県立博物館

栃木をひらく－平成の発掘から－／開発と埋蔵文化財

土浦市立博物館

紀要第８号

群馬県立歴史博物館

紀要第19号、縄文文化の十字路・群馬

浦和市立郷土博物館

浦和市博物館研究調査報告書　第25集、見沼・その歴史と文化

国立歴史民俗博物館

研究年報５、研究報告第72、75、76集、要覧平成10年度

千葉県立房総風土記の丘

年報20

千葉県立中央博物館

研究報告－人文科学－通巻11号

大田区立郷土博物館

製作工程の考古学、紀要第８号

出光美術館

館報第103号

茅ヶ崎市文化資料館

文化資料館調査研究報告６

平塚市博物館

年報第21号、自然と文化第21号、相模国府とその世界

小田原市郷土文化館

収蔵品目録No.１

松本市立考古博物館

松本市文化財調査報告No.130　境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ、同No.131　今井北耕地遺跡Ⅱ、同No.132　松本城下町跡、同No.133　向原遺跡、同No.134　蟻ヶ崎遺跡

長岡市立科学博物館

ＮＫＨ　No.73、研究報告第33号

長野県立歴史館

研究紀要第４号

氷見市立博物館

平成９年度年報　第16号

石川県立歴史博物館

合戦と武具、年報第６号、紀要第11号、獅子頭

金沢市民俗文化財展示館

収蔵品目録

敦賀市立博物館

紀要第13号、越前愛発関調査概報Ⅰ

清水町立郷土資料館

清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　越前・明寺山廃寺

土岐市美濃陶磁歴史館

城下町のやきもの

静岡市立登呂博物館

コメづくりの中の漁り

浜松市博物館

浜松市博物館館報Ⅹ、文字の文化史

名古屋市見晴台考古資料館

大高南地区遺跡発掘調査報告書、徳重北部古窯跡発掘調査概要報告書、高蔵遺跡第17次発掘調査報告書、高蔵遺跡第18次発掘調査報告書、寺山２号墳発掘調査報告書、名古屋市文化財調査報告38　正木町遺跡第７～９次、銭瓶谷古窯群発掘調査の概要

名古屋市博物館

陶磁器の文化史、研究紀要第21巻

高浜市やきものの里かわら美術館
平成７・８年度年報
半田市立博物館
年報平成９年度、研究紀要No.19
斎宮歴史博物館
研究紀要七、みちのくのみやび
鈴鹿市考古博物館
鈴鹿市埋蔵文化財調査年報
滋賀県立安土城考古博物館
平成９年度年報、紀要第６号、ムラの変貌、鹿深
大阪府立弥生文化博物館
縄紋の祈り・弥生の心
大阪市立博物館
近世大坂画壇の調査研究、館報No.37、研究紀要第30冊
吹田市立博物館
蔵人遺跡、垂水遺跡・昭和町遺跡Ｂ地点ほか、吉志部瓦窯跡(工房跡)、圓照寺准胝堂調査報告書、大正時代の達磨窯
大東市歴史民俗資料館
大東市埋蔵文化財調査報告第14集　メノコ遺跡発掘調査報告書、北新町遺跡第４次発掘調査概要報告書
八尾市立歴史民俗資料館
館報平成七年・八年度、研究紀要第９号
太子町立竹内街道歴史資料館
館報第４号
西宮市立郷土資料館
ウィルキンソンタンサン鉱泉株式会社宝塚工場調査報告書、神呪寺八十八箇所調査報告書、館報平成９年度、研究報告第３集、紅野芳雄「考古小録」
香芝市二上山博物館
弥生戦争とサヌカイト
山口県立山口博物館
研究報告第24号、館報第21号
下関市立考古博物館
研究紀要第２号、年報３
海南町立博物館
大里２号墳発掘調査報告書
芦屋町歴史民俗資料館
芦屋町遺跡詳細分布調査報告書　芦屋町文化財調査報告書第９集
佐賀県立名護屋城博物館
年報平成９年度、名護屋城博物館調査報告第１集　名護屋城跡
國立中央博物館
國立中央博物館所蔵　ガラス乾板目録集Ⅰ

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
年報９、10
筑波大学歴史・人類学系考古学コース
先史学・考古学研究第９号、歴史人類第26号
明治大学博物館事務室
研究報告第３号
東洋大学文学部史学科研究室
紀要第51集、白山史学第34号
日本大学史学会
史叢第58号
早稲田大学考古学会
古代第104号
東京大学考古学研究室
研究紀要第15号
國學院大學考古学資料館
紀要第14輯
東京都立大学人文学部考古学研究室
東京都立大学考古学報告３　人類誌集報
帝京大学山梨文化財研究所
遺跡・遺物から何を読みとるかⅠ、一宮町文化財調査報告第23集　西田町遺跡調査報告書、同第26集　南西田遺跡調査報告書、塩川下河原堤防遺跡発掘調査報告書、中部横断自動車道文化財調査報告書
富山大学人文学部考古学研究室
象鼻山１号古墳　養老町埋蔵文化財調査報告第２冊、市浦村埋蔵文化財調査報告書第９集　十三湊遺跡、氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ　氷見市埋蔵文化財調査報告書第25冊
大手前女子大学文学部
遊牧騎馬民族文化の生成と発展過程の考古学的研究
天理大学考古学研究室
神殿と神像、古事　紀要第１、２冊、池内横穴墓群発掘調査整理報告書
天理大学附属天理参考館
桧野照武氏旧蒐資料目録２
奈良大学文学部文化財学科
文化財学報第16集
島根大学埋蔵文化財調査研究センター
島根大学埋蔵文化財調査研究報告第２冊　島根大学構内遺跡第３次調査
岡山理科大学図書館
自然科学研究所研究報告第23号
徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島大学埋蔵文化財調査報告書第１巻　庄・蔵本遺跡１
福岡大学文学部考古学研究室
五郎山古墳　筑紫野市文化財調査報告書第57集、上臼井日吉古墳　碓井町文化財調査報告書第３集
熊本大学埋蔵文化財調査室
年報４
鹿児島大学埋蔵文化財調査室
年報12

北網圏北見文化センター
北進遺跡
東邦考古学研究会
東邦考古第22号
日本貿易陶磁研究会
貿易陶磁研究第11、14号
(財)府中文化振興財団
府中市郷土の森紀要第11号
馬込宿舎遺跡発掘調査団
久保遺跡発掘調査報告
町田木曽森野地区遺跡調査会
木曽森野遺跡Ⅳ・Ⅴ
国分寺市遺跡調査会

多摩蘭坂遺跡Ⅱ

都内遺跡調査会

坂下遺跡

葛飾区遺跡調査会

葛飾区遺跡調査会調査報告第42集　本郷遺跡Ⅶ、同第43集　柴又河川敷遺跡Ⅳ、葛飾区埋蔵文化財調査年報平成7、8年度

日野新町一丁目住宅遺跡調査会

姥久保遺跡

あきる野市秋川南岸道路関連遺跡調査会

坪松B・引谷ヶ谷戸・儘上・天王沢

国立国会図書館

日本全国書誌第21号

(株)新人物往来社

空から見た日本の城　西日本編

(株)小学館

海をわたって来た人々

日本考古学協会

日本考古学年報49、日本考古学第4、5号

遺跡調査会

境大塚遺跡

若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書

玉川文化財研究所

関東学院大学小田原校地内遺跡、木曽森野南遺跡発掘調査報告書、津久井町No.62遺跡発掘調査報告書、下古沢駒飼遺跡発掘調査報告書、沢狭遺跡発掘調査報告書

富山市埋蔵文化財調査整理室

吉倉B遺跡試掘調査概要、上新保遺跡試掘調査報告、四方北窪遺跡、史跡北代遺跡、史跡北代遺跡Ⅱ、水橋金広遺跡・水橋田伏南遺跡ほか、水橋・清水堂E遺跡ほか

(株)郷土出版社

福知山・綾部の歴史

リキア地方ビザンティン遺跡調査団

聖ニコラオスの島

滋賀県安土城郭調査研究所

安土城跡発掘調査報告7、安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅲ　大手道・伝羽柴秀吉邸跡、同Ⅳ　大手道、年報1995、1996年度

人文科学とコンピュータ

人文科学とコンピューターイメージ処理ー

(財)古代學協會

古代文化第50巻第5～8号

中世土器研究会

中世前期の貿易陶磁の流通

古代を考える會

古代学評論第5号

尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成5年度、尼崎市文化財調査報告第26集　尼崎市内遺跡

姫路市立城郭研究室

姫路城跡　石垣修理工事報告書6

西近畿文化財調査研究所

西近畿文化財調査研究所調査報告書第1集　播州葡萄園

奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所史料第49冊　山内清男考古資料9

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

トイレ遺構の総合的研究

古代の土器研究会

7世紀の土器(近畿東部・東海編)、同(近畿西部編)

岡山県古代吉備文化財センター

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123　高下遺跡・浅川古墳群ほか、同124　窪木遺跡2、同125　伊福定国前遺跡2、同126　北方下沼遺跡・北方横田遺跡ほか、同127　津寺遺跡5、同128　大岩遺跡・田益田中遺跡ほか、同129　大田茶屋遺跡2・大田障子遺跡ほか、同130　十六夜山古墳・十六夜山遺跡、同131　水別古墳群・水別遺跡、同132　段林遺跡・段林古墳、同133　室尾石生谷口古墳ほか、同134　清水谷遺跡ほか

博物館等建設推進九州会議・編集委員会

Museum　kyushu　通巻59、60号

(財)京都市埋蔵文化財研究所

水垂遺跡　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊、平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要、研究紀要第4号

京都市埋蔵文化財調査センター

京都市内遺跡発掘調査概報　平成9年度、京都市内遺跡立会調査概報　平成9年度、京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度

(財)向日市埋蔵文化財センター

向日市埋蔵文化財調査報告書第45、46集、史跡長岡宮大極殿跡保存整備事業報告、都城9

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市埋蔵文化財調査報告書第10～12集、年報平成8年度

京都府教育委員会

埋蔵文化財発掘調査概報(1998)

網野町教育委員会

京都府網野町文化財調査報告第12集　町内遺跡発掘調査概要

大宮町教育委員会

左坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報　京都府大宮町文化財調査報告書第12集、平成9年度町内遺跡試掘調査概報　同第13集

三和町教育委員会

三和町史　資料編

京田辺市教育委員会

三山木地区特定土地区画整理地内試掘調査概報　京田辺市埋蔵文化財調査報告書第26集、魚田遺跡第3次発掘調査概報　同第27集

山城町教育委員会

昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告　京都府山城町埋蔵文化財調査報告第20集、第2回山城町歴史シンポジウム　高麗寺

加茂町教育委員会

加茂町史　第四巻資料編1、加茂町文化財調査報告第15集　恭仁宮(京)跡発掘調査概要

京都国立博物館

平成8年度年報

京都府京都文化博物館

秀吉と京都

京都府立総合資料館

資料館紀要第26号

京都市歴史資料館

京都市の文化財(第10回)

京都市考古資料館

年報平成５・６年度、同平成７・８年度、洛中桃山陶器の世界

加悦町古墳公園はにわ資料館

白米山古墳Ⅱ　加悦町文化財調査報告書第26集、歴史探訪　丹後の中世社会を探るⅠ、同丹後の古代中世社会を探るⅡ

綾部市資料館

「色」

亀岡市文化資料館

横穴式石室のはじまり、館報第５号

宇治市歴史資料館

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第39、41集

城陽市歴史民俗資料館

横穴式石室のはじまり、火と人のくらし、館報第３号

京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学構内遺跡調査研究年報　1994年度

花園大学考古学研究室

花園大学構内調査報告Ⅴ

立命館大学文学部日本史学専攻考古学コース

研究報告第４冊　鳴谷東古墳群、同第７冊　久米田貝吹山古墳

京北町文化財を守る会

京北の文化財

精華町の自然と歴史を学ぶ会

波布理曽能第15号

足利健亮

大垣市埋蔵文化財調査報告書第５集　大垣市遺跡詳細分布調査報告書

麻生　優

日本における洞穴遺跡の構造論的研究

河野一隆

よみがえる須玖・岡本遺跡群、須玖岡本遺跡　春日市文化財調査報告書第23集、歴史探訪　丹後の古代中世社会を探るⅡ、板屋Ⅲ遺跡、地域相研究第22号、北九州市文化財調査報告書第43集　北方遺跡、同第217集　峠遺跡

椚　國男

多摩考古第28号

林　博通

人間文化４号

森島康雄

出土銭貨第９号

山本祐作

東播磨第５号

編集後記

情報69号が完成しましたので、お届けします。

本号では、平成10年度調査のうち、顕著な成果のあった、内里八丁遺跡、浦入遺跡、長岡京跡を中心にとりあげました。特に、浦入遺跡の土器製塩と長岡京跡の鋳鉄鋳物生産に関する論考は、府下の律令制下の生産組織の実態が、明らかになりつつあることを予感させます。

（編集担当＝河野一隆）

京都府埋蔵文化財情報 第69号

平成10年9月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877（代）

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961（代）